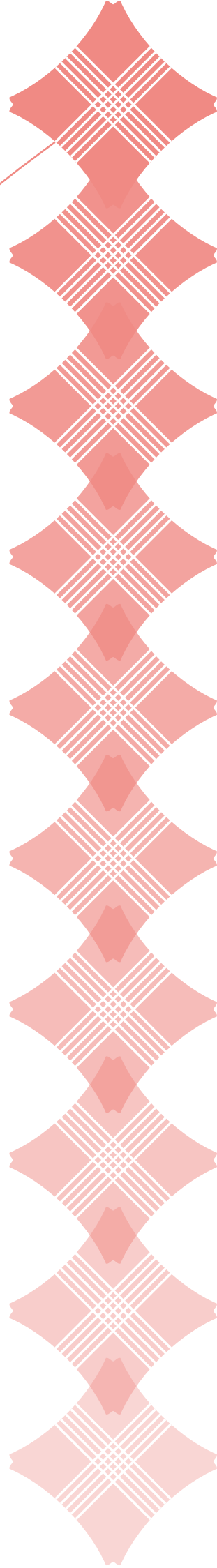


東京家政大学博物館 年報

令和3年度
— 2021 —

Tokyo Kasei University Museum Annual Report



目次

1. 展示活動	
企画展	2
特別企画展	6
常設展	12
きせつ展示	14
2. 講座・講演	15
3. 利用状況	16
4. 寄贈資料・図書	17
5. 資料特別利用	18
6. 展示・講座等への協力	19
7. 資料保存・修復	19
8. 博物館実習	20
9. 広報・普及活動	22
10. 東京家政大学博物館友の会(博友会)	22
11. 博物館の価値再創出・発信プロジェクト	23
12. 博物館運営委員会	24
13. 博物館職員	24

* * *

調査研究報告

令和3年度「調査研究」について	26
難波 知子： 明治大正期における女袴の考案と改良 —裁縫書を手がかりとして—	27
濱田 仁美： 綿織物のバリエーションを捉える —裁縫雛形の素材織物特性の科学的分析—	33
杉野 公子・小野 理佐子： 毛織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性について —洋服雛形製作による検証—	39

1. 展示活動

企画展「ふしめの儀式」

会 期 令和3年5月13日(木)～6月16日(水)

会 場 百周年記念館5階 第1展示室

入館者数 799名(25日間)

広 報 物 ポスター、チラシ

配布資料 展示品目録(全4頁)、関連図書目録(東京家政大学図書館作成:全2頁)全てデータ配布

展示趣旨 人の一生において、入学や卒業、成人、結婚などを「ふしめ」ととらえ、現在でも祭祀や儀式が行われている。通過儀礼と呼ばれるそれらと共に、時季によって催される年中行事も、人々の生活環境や社会情勢、文化に作用されながら、時代に伴って変化してきた。

通過儀礼のなかでも特に重要視される冠婚葬祭は、明治維新と太平洋戦争を大きな境目として、徐々に現在の形式が整えられてきた。

こうしたふしめの儀式が行われる日は、普段とは違う特別な装いに身を包むことで、儀式の重要性や非日常性が示されている。それらに目を向けると、人々がいかに儀式における装いに重きをおいていたかをうかがい知ることができる。

本展では、大学生にとって最も身近なふしめといえる成人式から一生を終えるまでの儀式や年中行事について、その装いを中心に紹介し、どのようにして形式が移り変わったのか、変化のようすにも目を向けた。

コ ロ ナ 本展は、令和2年度に開催予定であったが、新型コロナウイルス対策 感染拡大予防のため、1年間開催を延期し、令和3年度の開催となった。日本博物館協会が公表している「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」にのっとり、基本となる感染予防策を実施した。具体的対策としては、学内限定公開、入館制限の実施、イベント及びハンズオン展示や図録の見本設置の中止、配布物のQRコードによるデータ配布、常時の換気、1日2回の展示室の消毒、受付の飛沫防止パーテーションの設置など。当対策は企画展・特別企画展において同様に実施した。

ま と め 本展で目指したのは、一度きりの人生におけるひとつひとつのふしめ、その特別な日の儀式に込められた想いに心を寄せる機会となることである。学内限定公開のため来館者のほとんどが本学学生となったことで、ターゲットを学生に絞った解説や展示内容を心がけた。



ポスター



オリジナル絵双六



卒業制作のウェディング・ドレス



通過儀礼の衣装(宮参り、賀寿)

「儀式」という言葉から堅いイメージをもっていたとしても、親しみを感じてもらうためのアプローチとして、展示室までの廊下に主な通過儀礼を取り上げた錦絵風の絵双六を掲示した。

展示構成は冠婚葬祭を中心とし、本学卒業生の制作品も展示するなど、本学との関連性に重きをおいた。序章では成人までの通過儀礼を紹介し、第1章～第4章では裳、三枚重の婚礼衣装、大礼服や軍服などの礼装を通じて冠婚葬祭における様式や衣装の移り変わりについて解説した。

また、本学校祖である渡邊辰五郎の葬儀に触れたことや、本学卒業生が実際に着用した着物・袴を展示したことで、ふしめの儀式をより身近に感じてもらえたようである。

以下に来館者アンケートからの抜粋を紹介する。

[教員・職員]

- *当時の海軍の軍服が勇ましく、豪華で印象的でした。(20代・女性)
- *昔から今の流れを分かりやすく簡潔に展示されていて観やすかった。制服図解や色刷り見本等の古い書籍が興味深かったので今後も観たい。(50代・男性)
- *コロナ禍で美術館や博物館に行けていなかったので、久しぶりに文化的な活動をすることができ、とてもうれしく思いました。展示は、男性の礼装が並んでいる様子が迫力がありよかったです。また、喪服における白から黒への転換について、興味深く見させていただきました。(50代・女性)

[本学学生・生徒]

- *身分だけではなく時代や暦によっても各儀式の服装に大きな違いがあり、それらを知ることで日本文化を考える大変貴重な時間が過ごすことができました。階級の高い者から低い者へ浸透した文化なども今でも残っているものもあり興味深かったです。(大学4年)
- *振袖の綺麗な刺繍に驚いた。説明文も読みやすく、被服の知識が皆無でも楽しむことができました。(高校2年)
- *喪服のあり方だけでなく、校祖や沖縄の葬式についても展示してあったのが特徴的で良いと思った。(大学3年)
- *人生の節目で身につける衣装には自分が知っている以上に意味があるのだと知って驚いた。ちょうど、成人式を行った代だったので振袖の話を知れてよかった。(大学2年)
- *東京裁縫女学校の記章が素敵でした。季節の祝い事を見て、今は祝われなくなってきたのでこのような行事を大切にしていきたいです。(大学4年)



婚礼衣装 (打掛、白無垢)



世代による婚礼衣装の違い



軍服



厨子甕



年中行事

1. 展示活動

展示品目録

資料名	使用・製作年	備考
※備考欄に所蔵表記のないものは、すべて東京家政大学博物館蔵		
序章 通過儀礼—ふしめの祝い—		
①ケース		
一ツ身 黒縮緬地菊御簾模様	大正時代	
犬張子		
でんでん太鼓		
大黒帽子 ちゃんちゃんこ	昭和時代	
銀盃 座布団(百歳祝い記念品)	昭和時代	
第1章 冠—成人の祝い—		
②ケース		
裳 白三重禪文桐竹尾長鳥模様	大正4(1915)年	大正度の御即位礼 親王妃殿下着用
振袖 紅綸子地枝垂桜模様	平成19(2007)年	
③ケース		
徽章バンド	大正11(1922)年頃	
角帽	昭和23(1948)年頃	
記章 東京裁縫女学校	明治時代後期～昭和6(1931)年頃	
記章 東京女子専門学校	大正11(1922)年頃～昭和24(1949)年	
記章 東京家政大学	昭和24(1949)年頃	
④ケース		
着物 袴	昭和48(1973)年	個人蔵
着物 袴	昭和57(1982)年	個人蔵
着物 袴	令和2(2020)年	個人蔵
第2章 婚—結婚の祝い—		
⑤ケース		
打掛 鼠縮緬地松竹梅鶴亀模様	江戸時代末期～明治時代	
白無垢の婚礼衣装	昭和32(1957)年	
⑥ケース		
振袖 白縞子地梅模様	大正時代～昭和時代	共立女子大学博物館蔵
振袖 赤縞子地竹模様	大正時代～昭和時代	共立女子大学博物館蔵
振袖 黒縞子地松模様	大正時代～昭和時代	共立女子大学博物館蔵
振袖 薄茶縮緬地梅模様	明治時代～大正時代	個人蔵
振袖 紅縮緬地竹模様	明治時代～大正時代	個人蔵
振袖 紫縮緬地若松鶴模様	明治時代～大正時代	個人蔵
⑦ケース		
『手鑑模様節用』	江戸時代	梅丸ゆうせん著
⑧ケース		
『千代田之大奥 婚礼』	明治29(1896)年	揚州(橋本)周延画 福田初次郎発行
⑨ケース		
屠蘇器		
婚礼用折形(雄蝶)		
婚礼用折形(雌蝶)		
⑩ケース		
『和宮降嫁役人附・行列附』	文久元(1861)年	小林左之進
⑪ケース		
『故実叢書 貞丈雑記 巻之七』	明治32(1899)年	伊勢貞丈著 今泉定介編 吉川弘文館
『小笠原諸礼大全』	文化6(1809)年	岡田玉山著
『女礼式之内婚礼図』	明治26(1893)年	揚州(橋本)周延画
⑫ケース		
黒振袖の婚礼衣装	昭和16(1941)年	
ウェディング・ドレス	昭和42(1967)年	
留袖 黒縮緬地松鶴模様	昭和2(1927)年	
丸帯 鳳凰扇花模様錦	昭和2(1927)年	
⑬ケース		
①丸帯 鼓貝桶扇面模様錦	昭和16(1941)～20(1945)年	
②丸帯 松菊雪輪模様錦	昭和10(1935)年頃	
③丸帯 松菊御所車模様錦	昭和14(1939)年	
④名古屋帯 鶴に松菊模様錦	昭和時代初期	
⑤丸帯 波に鶴模様錦	昭和17(1942)年	

資料名	使用・製作年	備考
⑥丸帯 菊鶴橋扇面模様錦	昭和24(1949)年	
第3章 葬—死者の弔い—		
⑭ケース		
海軍士官第一種軍衣	大正8(1919)年頃	
海軍少将正服	明治29(1896)~37(1904)年頃	
海軍少将通常礼装	大正13(1924)年頃	
⑮ケース		
奏任文官大礼服	大正3(1914)年頃製作	
陸軍将校正装	大正時代初期	
⑯ケース		
大正天皇御大喪ポストカード		
⑰ケース		
帝国服制要覧	明治44(1911)年	大阪毎日新聞社
⑱ケース		
燕尾服	大正2(1913)年頃	
フロックコート	明治時代	
モーニングコート	昭和時代	
着物 白羽二重地	明治時代~大正時代	
留袖 変わり織地	大正時代~昭和時代初期	
黒留袖の喪服	昭和時代後期	
⑲ケース		
印半纏		
裁縫雛形 白張	明治38(1905)年	
裁縫雛形 白張ノ袴	明治38(1905)年	
⑳ケース		
『渡邊辰五郎君追悼録』	明治41(1908)年	小森甚作編 東京裁縫女学校出版部
『渡邊辰五郎翁伝』	昭和4(1929)年	新治吉太郎著 渡邊校友会
㉑ケース		
『人倫訓蒙図彙 七』	元禄3(1690)年	源三郎
『人倫訓蒙図彙 六』	元禄3(1690)年	源三郎
㉒ケース		
厨子籠 上焼本御殿型		
第4章 祭—季節の祝い—		
㉓ケース		
焙烙 おがら		
ぼた餅		
精霊馬		
㉔ケース		
正月 鏡餅 屠蘇器		
上巳の節句 雛人形		
端午の節句 五月人形		
七夕 笹飾り そうめん		
重陽の節句 菊の被綿 菊花酒		
酉の市 熊手		
七五三 男児 女児		
㉕ケース		
『改暦弁』	明治6(1873)年	福澤諭吉著 慶應義塾
コラム 東京家政大学の礼法授業		
㉖ケース		
『修正 女子作法書 心得之部』	明治40(1907)年	佐方鎮子・後閑菊野著 明治図書株式会社
『修正 女子作法書 実習之部』	明治40(1907)年	佐方鎮子・後閑菊野著 明治図書株式会社
『御園生与曾講述 昭和の作法』	昭和16(1941)年	渡邊滋編 渡邊女学校出版部
別室展示 服飾美術学科卒業制作のウェディング・ドレス		
「レースの縫製の研究とウェディング・ドレスの製作」	令和2(2020)年	個人蔵
「シルクの縫製の研究とウェディング・ドレスの製作」	令和2(2020)年	個人蔵
「カラードレスによるロングスリーブとギャザーの研究」	令和2(2020)年	個人蔵

1. 展示活動

特別企画展「東京家政大学創立140周年記念 裁縫雛形と自主自律の教え」

会 期 令和3年11月4日(木)～12月9日(木)

会 場 百周年記念館5階 第1展示室

入館者数 809名(25日間)

出 版 物 図録『裁縫雛形と自主自律の教え』(カラー28頁)

広 報 物 ポスター、チラシ

配布資料 展示品目録(全8頁)、関連図書目録(東京家政大学図書館作成:全3頁)全てデータ配布

展示趣旨 学校法人渡辺学園東京家政大学は、明治14(1881)年に渡邊辰五郎が開いた私塾「和洋裁縫伝習所」にはじまり、令和3(2021)年に創立140周年を迎えた。

明治7(1874)年、女子の就学率を上げるために授業に取り入れられた「裁縫」の教師として、渡邊辰五郎は故郷(現在の千葉県長生郡)の長南小学校に迎えられた。

学校教育という一斉教授の場で裁縫を教えるにあたり、渡邊辰五郎は教科書や裁縫掛図等の教材を工夫して、様々な裁縫教授法を生み出した。衣服や生活用品を縮尺で製作する「裁縫雛形」はその最たるものであり、これらの画期的な教授法は教育界の注目を集め、裁縫をひとつの主軸とした近代女子教育の基礎が築かれた。

本展では、裁縫雛形を明治・大正・昭和の時代に区切って展示し、本学の歴史をたどりながら、渡邊辰五郎の教えと女子教育にかけた想いをひもといた。また、本学で現在行われている裁縫雛形研究の成果を展示や関連イベントで公開し、裁縫雛形の継承と活用の可能性を示す場とした。

関連事業 東京家政大学創立140周年記念シンポジウム「裁縫雛形が語る女性の学びと装い」 詳細はp15

そ の 他 [展示解説動画]

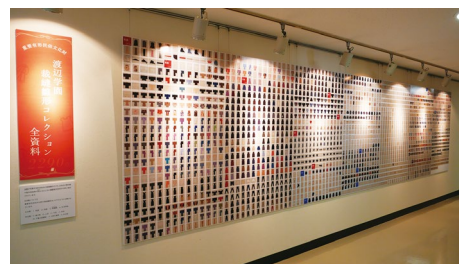
展示解説動画「裁縫雛形と自主自律の教え」(18:16) および英語字幕付きの「*Saiho Hinagata and the Spirit of Independence and Autonomy*」を制作。YouTube動画で公開している。

[バーチャル展示室(360°カメラ)]

展示室内を360°パノラマカメラで撮影し、バーチャル展示室を制作。当館ホームページにて公開している。



ポスター



会場へのアプローチ
「渡辺学園裁縫雛形コレクション」全資料の写真パネル



別室展示「裁縫雛形研究」



展示室

[ミュージアム展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」の導入]

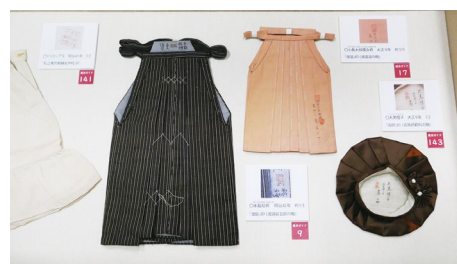
ミュージアム展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」を導入し、一部の展示品について、展示室内で利用できる資料解説を提供。会期終了後は、アプリ内で収蔵品リストとして機能している。



1人の学生が製作した107点の裁縫雛形



裁縫道具



墨書と検印



改良服



裁縫とともに昭和を生きた卒業生

ま と め 創立140周年という記念すべき年に、裁縫雛形を通して本学の建学の精神や歴史を広く学内外に知っていただきたいと考え、一般公開を目指したが、本展もコロナ感染拡大防止の観点から学内限定公開となった。多くの方にご覧いただけないことは残念ではあったが、展示解説動画やバーチャル展示室等のデジタルコンテンツを制作・公開できたことは、今後自校史教育等での利用も見込め、有意義だったといえる。何より、展示を鑑賞した本学の学生・生徒や教職員から、裁縫雛形や自校の歴史に関心を持ち、誇りに思ったという感想が寄せられたことは、大きな収穫だった。

以下に来館者アンケートからの抜粋を紹介する。

[教員・職員]

*展示がたくさんあって見やすく、目をひくものばかりでした。展示ガイドの導入もすばらしいと思います。(20代・女性)

*東京家政大学の歩みと、裁縫雛形による裁縫教授法の歴史がよく分かりました。卒業生たちが学んだことを活かして、その後どのような活躍をしていたのかも分かり、素晴らしいと思いました。(30代・女性)

*貴重な裁縫雛形をたくさん見ることができ、感謝いたします。卒業生の実寸大の作品も見ることができたことは大変勉強になりました。(50代・女性)

[本学学生・生徒]

*今ではあまり見ない着物の裁縫雛形をたくさん見ることができてよかった。今の授業で裁縫雛形を作らないことが残念だと思った。(中学3年)

*展示物が多く、見ていてとても楽しかったです。展示物を細かい部分まで見ることができ、そこから発見や気づきを得ることができました。(大学1年)

*歴史のある雛形について多角的な視点からの研究をしていても興味深かったです。(大学3年)

*裁縫の発展の歴史を感じることができ、とても見応えのある展示でした。昔の時代のものとは思えないほど、素敵なデザイン of 衣服ばかりで感動しました。(大学4年)

1. 展示活動

展示品目録

資料名	使用・製作年	縮尺	備考
【凡例】			
・すべて東京家政大学博物館蔵			
・資料名の中の○は、重要有形民俗文化財を示す			
・製作年は原則として製作者の卒業年とする			
第1章 裁縫雛形とははじめ			
① ケース 裁縫雛形とは			
○ 雛形尺	明治時代		
紙の雛形	明治33年	約1/3	
○ 『普通裁縫教授書』上中下巻	明治13年		渡邊辰五郎 著、石川治兵衛 発行
○ 『普通裁縫算術書』全	明治14年		渡邊辰五郎 著、石川治兵衛 発行
○ 袖形、襟形	明治時代		
○ 『たちぬひのをしへ』まきの一	明治18年		渡邊辰五郎 著、清水卯三郎 発行
② ケース 裁縫道具			
○ 裁縫箱 2点	大正、昭和時代		
○ 針 2組	大正、昭和時代		
○ 糸巻 3組	明治、大正、昭和時代		
○ 鋏	昭和時代		
○ 裁庖丁	明治時代		
○ 握り鉄	明治時代		
③ ケース 縮尺について			
本裁女物単衣本重	大正10年代		
○ 裁縫雛形 本裁女物単衣本重	明治41年	約1/3	
○ 裁縫雛形 二枚重	大正8年	1/2	
○ 裁縫雛形 夜着	昭和15年	1/4	
○ 裁縫雛形 大夜着	大正12年	約1/6	
夜着	昭和時代		
④ ケース 雛形尺について			
⑤ ケース 教科書			
『普通裁縫教授書』上巻	明治13年		渡邊辰五郎 著、石川治兵衛 発行
『普通裁縫算術書』全	明治14年		渡邊辰五郎 著、石川治兵衛 発行
『たちぬひのをしへ』まきの一	明治18年		渡邊辰五郎 著、清水卯三郎 発行
『普通裁縫教科書』巻一	明治30年		渡邊辰五郎 著、東京裁縫女学校 発行
⑥ ケース たくさん作られたアイテムは？			
○ 裁縫雛形 本裁本比翼・附比翼	明治45年	約1/3	
○ 裁縫雛形 本裁女物単衣本重	大正9年	約1/3	
○ 裁縫雛形 小裁単衣本重	大正9年	約1/3	
○ 裁縫雛形 本裁十番馬乗袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 セツ子男袴	明治41年	約1/3	
○ 裁縫雛形 五ツ子男袴	大正12年	約1/3	
○ 裁縫雛形 本裁セツ稜襠有女袴	大正9年	約1/3	
○ 裁縫雛形 中裁大紋腰女袴	大正2年	約1/3	
○ 裁縫雛形 小裁大紋腰女袴	昭和3年	約1/3	
裁縫雛形 蚊帳	昭和4年	1/5	
裁縫雛形 筆筒油單	大正12年	約1/6	
○ 裁縫雛形 本裁普通シャツ	大正6~7年	約1/3	
裁縫雛形 小裁普通シャツ	大正7年	約1/3	
○ 裁縫雛形 中裁普通シャツ	大正2年	約1/3	
○ 裁縫雛形 大人太鼓胴シャツ	昭和3年	約1/3	
裁縫雛形 ホワイトシャツ	大正12年	1/2	
○ 裁縫雛形 本裁紐付ズボン下	大正9年	約1/3	
裁縫雛形 小裁紐付ズボン下	大正7年	約1/3	
○ 裁縫雛形 中裁紐付ズボン下	明治45年	約1/3	
○ 裁縫雛形 大人腰廻付ズボン下(甲)	大正14年	約1/3	
裁縫雛形 大人腰廻付ズボン下(乙)	大正6年	約1/3	
⑦ ケース 墨書と検印			
○ 裁縫雛形 五條袷袋	明治34年	約1/3	「渡邊氏之印」
○ 裁縫雛形 シミーズ	明治38年	1/2	「東京裁縫女学校検印」
○ 裁縫雛形 日除頭巾	明治38年	約1/3	「渡邊辰五郎之見之印」
○ 裁縫雛形 ドゥローアス	明治41年	1/2	「私立東京裁縫女学校」印
○ 裁縫雛形 本裁袴	明治42年	約1/3	「渡辰」印
○ 裁縫雛形 小裁大紋腰女袴	大正9年	約1/3	「渡滋」印
○ 裁縫雛形 大黒帽子	大正9年	1/2	「高師」印

資料名	使用・製作年	縮尺	備考
⑧ ケース 教授細目と裁縫品証明修正簿			
東京裁縫女学校(本科・普通科)教授細目	明治41～43年使用		明治38年4月改定
東京裁縫女学校(高等師範科)教授細目	大正3年頃使用		大正元年4月改定
裁縫品証明修正簿	大正14年		東京裁縫女学校和服専攻科
裁縫雛形 大人胸當付飾シャツ	大正4年	約1/3	
⑨ ケース 細部へのこだわり			
○ 裁縫雛形 女簡単服	大正9年	1/2	
○ 裁縫雛形 夏帽子	大正4年	1/2	
裁縫雛形 雪帽子	大正11年	1/2	
○ 裁縫雛形 山附脚絆	大正11年	約1/3	
○ 裁縫雛形 手甲(指附)	大正11年	約1/3	
○ 裁縫雛形 手甲	大正12年	約1/3	
○ 裁縫雛形 手刺	大正9年	約1/3	
裁縫雛形 パンツ	大正15年	1/2	
裁縫雛形 パンツ(裏側)	昭和3年	1/2	
○ 裁縫雛形 女東コート	明治30年	約1/3	
○ 裁縫雛形 四ツ身被布	明治43年	約1/3	
○ 裁縫雛形 一ツ身袖無被布	明治45年	約1/3	
⑩ ケース 生地について			
裁縫雛形 手術衣(甲)	明治38年	約1/3	
裁縫雛形 子供物西洋前掛	大正9年	約1/3	
裁縫雛形 渡邊式改良袴	大正15年	約1/3	
裁縫雛形 腹掛	大正13年	約1/3	
裁縫雛形 五ツ子男袴	大正15年	約1/3	
裁縫雛形 袴	大正12年	約1/3	
○ 裁縫雛形 女簡単服	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 本裁裕道行	明治34年	約1/3	
裁縫雛形 袍	明治38年	約1/3	
裁縫雛形 表着	明治38年	約1/3	
裁縫雛形 シングルプレステッドサックコート	大正7年	1/2	
裁縫雛形 ハーフサークルケープ	大正7年	1/2	
裁縫雛形 陣羽織	江戸時代後期		
裁縫雛形 陣羽織	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 陣羽織	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 陣羽織	明治38年	約1/3	
第2章 明治時代の裁縫雛形			
⑪ ケース 多種多様な製作品			
○ 裁縫雛形 婦人服	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 婦人服	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 燕尾服	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 フルドレスヴェスト	明治38年	1/2	
裁縫雛形 フロックコート(複製)	平成7年	1/2	
○ 裁縫雛形 モーニングコート	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 ダブルプレステッドヲヴァーコート	明治41年	1/2	
○ 裁縫雛形 シャートウェイスト	明治41年	1/2	
○ 裁縫雛形 スリーゴワードコスチュームスカート	明治41年	1/2	
○ 裁縫雛形 イトンジャケット	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 スリーゴワードコスチュームスカート	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 ダブルプレステッドバスク	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 ゼレイニーディスカート	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 ボックスオーバーコート	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 シングルプレステッドジャケット	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 大直衣	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 小直衣	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 關腋袍	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 狩衣	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 直垂	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 大紋	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 大黒頭巾	明治36年	約1/3	
○ 裁縫雛形 宗十郎頭巾	明治36年	約1/3	
裁縫雛形 山岡頭巾	明治38年	約1/3	
裁縫雛形 吉原頭巾	明治38年	約1/3	

1. 展示活動

資料名	使用・製作年	縮尺	備考
○ 裁縫雛形 日除頭巾	明治36年	約1/3	
○ 裁縫雛形 法衣(両袈)	明治34年	約1/3	
○ 裁縫雛形 素絹	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 關腋袍ノ袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 刺貫袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 緋袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 大紋ノ袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 小袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 野袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 平袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 細袴	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 義經袴	明治38年	約1/3	
⑫ ケース 最も古い裁縫雛形			
○ 裁縫雛形 小裁単衣本重	明治30年	約1/3	
○ 裁縫雛形 丸胴着	明治30年	約1/3	
○ 裁縫雛形 女児服	明治30年	約1/3	
○ 裁縫雛形 本裁女物海水浴着	明治30年	約1/3	
○ 裁縫雛形 袖無夜着	明治30年	約1/3?	
⑬ ケース 紳士服-背広の製作-			
型紙 セビロ	明治33年	約1/3	
裁縫雛形 セビロ、チョッキ、ズボン	明治33年	約1/3	
製図 シングルプレステッドサックコート	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 シングルプレステッドサックコート	明治41年	1/2	
○ 裁縫雛形 パンツ	明治41年	1/2	
○ 裁縫雛形 シングルプレステッドヴェスト	明治41年	1/2	
『洋服裁縫教科書 第貳章』	明治37年		渡邊滋 著、東京裁縫女學校 発行
⑭ ケース 子供服			
○ 裁縫雛形 女児服	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 女児服	明治34年	約1/3	
○ 裁縫雛形 子供洋服	明治34年	約1/3	
○ 裁縫雛形 子供物西洋前掛(襷掛)	明治42年	約1/3	
○ 裁縫雛形 子供物西洋前掛(釦掛)	明治41年	約1/3	
裁縫雛形 学校外套・フード	大正12年	1/2	
裁縫雛形 ハーフサークルケープ	大正9年	1/2	
○ 裁縫雛形 学校制服	大正2年	1/2	
裁縫雛形 水兵形運動シャツ・ツボン	大正9年	約1/3	
裁縫雛形 水兵服・ツボン	大正9年	1/2	
⑮ ケース 改良服			
○ 裁縫雛形 改良被布女物	明治30年	約1/3	
○ 裁縫雛形 女股引	明治45年	約1/3	
○ 裁縫雛形 渡邊式改良袴	明治45年	約1/3	
○ 裁縫雛形 改良服女物	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 改良袴	明治38年	約1/3	
改良服(復元)	平成24年		
⑯ ケース 新しい習慣と衣服			
本裁女物海水浴着(復元)	平成22年		
裁縫雛形 本裁女物海水浴着	大正6年	約1/3	
裁縫雛形 本裁男物海水浴着	大正6年	約1/3	
裁縫雛形 本裁西洋寝間着	明治43年	約1/3	
裁縫雛形 小裁西洋寝間着	明治43年	約1/3	
裁縫雛形 大人料理前掛	大正9年	約1/3	
⑰ ケース 職業服			
○ 裁縫雛形 辯護士帽子、辯護士禮服	明治39年	約1/3	
法服(地方裁判所判事)	昭和時代初期		
○ 裁縫雛形 手術衣(乙)	昭和3年	約1/3	
○ 裁縫雛形 看護服・帽子	大正4年	約1/3	
○ 裁縫雛形 消毒衣	明治38年	約1/3	
⑱ ケース 民族服			
裁縫雛形 赤古里	明治34年	約1/3?	
裁縫雛形 赤古里	明治40年	約1/3?	
裁縫雛形 赤古里	明治41年	約1/3?	
裁縫雛形 背子	明治39年	約1/3?	

資料名	使用・製作年	縮尺	備考
裁縫雛形 長衣	明治39年	約1/3?	
裁縫雛形 朝鮮服(子供服)	明治30年代	約1/3?	
裁縫雛形 韓国小児服	明治39年	約1/3?	
裁縫雛形 朝鮮服大人冬着	明治38年	約1/3?	
裁縫雛形 行前	明治39年	約1/3?	
裁縫雛形 朝鮮男子服 袴	明治38年	約1/3?	
裁縫雛形 朝鮮袴	明治38年	約1/3?	
裁縫雛形 支那服	明治38年	約1/3?	
第3章 大正・昭和時代の裁縫雛形			
⑲ ケース 在学中の製作点数			
高等師範科3年間で製作された裁縫雛形107点			
⑳ ケース 同級生の裁縫雛形			
内1点○ 裁縫雛形 女単服 3点	大正7年		
内1点○ 裁縫雛形 シャモ裁附 3点	大正7年		
内1点○ 裁縫雛形 ドロワース 3点	大正7年		
内1点○ 裁縫雛形 寝冷不知 2点	大正7年		
㉑ ケース 関東大震災			
裁縫全書 『十二重の部』『束帯の部』 『袷綿入の部』『肌着の部』『単衣の部』	大正2～12年		渡邊滋 著 東京裁縫女学校出版部 発行
専門教育裁縫全書 『束帯及び五衣の部』『袷綿入の部』 『肌着帯の部』『単衣の部』	大正13～14年		渡邊滋、東京裁縫女学校、 東京女子専門学校 著 東京裁縫女学校出版部 発行
㉒ ケース コラム展示 他学の裁縫雛形			
朴沢学園の裁縫資料 6点	明治31年	1/3?	
名古屋裁縫女学校(現 相山女学園)の裁縫雛形 3点	明治38年～大正14年	1/3?	
聖和裁縫伝習所の裁縫雛形 2点	明治40年代	1/3?	
和洋裁縫女学校(現 和洋女子大学)の裁縫雛形 3点	明治34年～昭和3年	1/3?	
青山女学院手芸部(現 青山学院)の裁縫雛形 2点	明治28～32年	1/3?	
㉓ ケース 婦人服と子供服の変化―大正・昭和モダン―			
裁縫雛形 シャートウエスト	明治38年	1/2	
裁縫雛形 スリーゴワードコステュームスカート	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 シャートウエスト	大正11年	1/2	
○ 裁縫雛形 スリーゴワードスカート	大正11年	1/2	
裁縫雛形 婦人服	大正15年	1/2	
○ 裁縫雛形 子供洋服	明治38年	約1/3	
○ 裁縫雛形 女単服	明治41年	1/2	
○ 裁縫雛形 女単服	明治38年	1/2	
○ 裁縫雛形 女単服	大正9年	1/2	
○ 裁縫雛形 男単服	大正9年	1/2	
㉔ ケース 尺貫法からメートル法へ			
『児童洋服の部: 専門教育裁縫全書』	大正14年		渡邊滋他 著、東京裁縫女学校出版部 発行
ものさし(鯨尺・センチ尺)	大正～昭和時代		
裁縫品証明修正簿	昭和2年		
㉕ ケース 「昭和」と裁縫雛形			
雛形尺による裁縫雛形 8点	昭和2年	約1/3	
メートル尺による裁縫雛形 14点	昭和2年	1/2	
○ 牛込チエ製作の裁縫雛形 4点	明治39年	1/2, 約1/3	
イブニング・ドレス	昭和3年頃		
イブニング・ラップ	昭和3年頃		
裁縫道具(曲尺、チャコ、目打ち、糸切鋏、裁ち鋏、 ピンキング鋏)	大正～昭和時代		
ワンピース	昭和27年		
ジャケット、ブラウス、スカート	1949年製作		
○ 三木テイ製作の裁縫雛形 7点	大正14年	1/2, 約1/3	
夜着	昭和13年	1/4	
基礎縫標本、部分縫い2点	昭和13年		
仕事着 ドンザ	明治時代後期～昭和時代		
麻の葉模様産着	昭和時代		
百徳着物	平成時代		
別室展示 裁縫雛形研究			
○ 裁縫雛形 本裁単衣本重	大正11年	約1/3	
裁縫雛形 ゼレイニーデイスカート	明治38年	約1/3	

1. 展示活動

常設展① 「学園の歴史と創設者」「渡辺学園 裁縫雛形コレクション」「渡辺学園の歩み」

会 期 令和3年4月12日(水)～令和4年1月24日(月)

会 場 百周年記念館4階 第2展示室

広 報 物 ポスター(常設展①・②共通)

配布資料 新型コロナウイルス感染拡大予防のため、配布を中止。

展示趣旨 「学園の歴史と創設者」

本学の基礎を築いた校祖渡邊辰五郎と大学開学当初の学長青木誠四郎の業績、また二人が掲げた建学の精神「自主自律」、生活信条「愛情・勤勉・聡明」を併せて紹介。



学園の歴史と創設者 渡邊辰五郎

「渡辺学園裁縫雛形コレクション」

裁縫雛形は、明治から昭和にかけて、本学の教育課程の中で製作された衣服や生活用品等のミニチュアである。渡邊辰五郎が考案した裁縫教授法のひとつで、布地と時間が節約できる画期的な方法として好評を得た。

当館では、現在約5000点の裁縫雛形を所蔵しており、うち2290点が教科書や製作用具61点とともに、平成12年12月27日に国の重要有形民俗文化財に指定された。

当コーナーでは、和装、洋装、有職類、生活用品の裁縫雛形を約80点展示。半年(前期・後期)ごとに展示替えを行っている。



学園の歴史と創設者 青木誠四郎

「渡辺学園の歩み」

本学「学校法人渡辺学園」は、明治14年、渡邊辰五郎が本郷区湯島の地に開設した私塾「和洋裁縫伝習所」としてはじまる。当コーナーでは、学園設立時から現在に至るまで、伝統ある本学の歩みを紹介。



渡辺学園の歩み



渡辺学園裁縫雛形コレクション



渡辺学園裁縫雛形コレクション

常設展② コレクション展示 「日本の食－調味料のさしすせそ－」

会 期 前期：令和3年4月12日(月)～令和3年7月21日(水)

後期：令和3年10月1日(金)～令和4年1月24日(月)

*令和2年度が後期のみの公開(学内限定)となったため、令和3年度も引き続き同テーマでの展示を継続した。

会 場 百周年記念館4階 第3展示室

広 報 物 ポスター(常設展①・②共通)

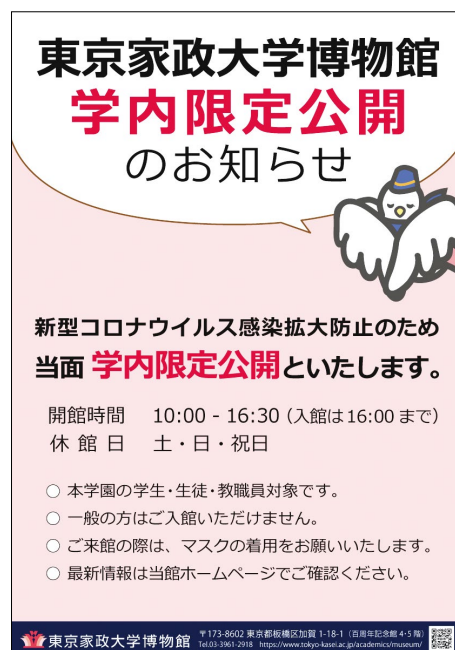
展示趣旨 「日本の食－調味料のさしすせそ－」

「和食」は2013年にユネスコ無形文化遺産に登録された。その和食を支えているのが「調味料」である。調味料は、私たちが普段食べている料理の多くに使われているが、その種類や効果など、知らない人も多いだろう。

日本で調味料というと、よく耳にするのが「さしすせそ」というフレーズだが、この「さしすせそ」が何を表しているかご存じだろうか。本展では、料理と切り離すことのできない調味料について「さしすせそ」を中心に紹介した。



ポスター(後期)



ポスター(学内限定公開)



日本の食－調味料のさしすせそ－

1. 展示活動

きせつ展示

展示場所 百周年記念館1階ロビー

展示趣旨 日本の主な年中行事を、各行事につわる展示物および解説パネル等で紹介する。

テーマと期間

花見：令和3年3月19日～4月1日

入学祝い：令和3年4月2日～4月9日

端午の節句：令和3年4月22日～5月7日

母の日：令和3年5月8日～5月16日

夏越の祓：令和3年6月16日～6月30日

七夕：令和3年7月1日～7月7日

お盆：令和3年7月8日～7月18日、7月29日～8月4日

土用の丑の日：令和3年7月19日～7月28日

重陽の節句：令和3年9月2日～9月14日

十五夜：令和3年9月15日～9月21日

十三夜：令和3年10月8日～10月18日

酉の市：令和3年11月8日～11月9日、11月16日～11月21日、
12月6日～12月9日

七五三：令和3年11月10日～11月15日

正月事始め

羽子板市 } 令和3年12月10日～12月23日

冬至

正月：令和3年12月24日～令和4年1月11日

小正月：令和4年1月12日～1月26日

節分

初午 } 令和4年1月27日～2月13日

針供養

ひな祭り：令和4年2月24日～3月3日

卒業祝い：令和4年3月11日～3月21日

花見：令和4年3月22日～4月3日



お盆



重陽の節句



節分・初午・針供養



十五夜

2. 講座・講演

博物館講座 東京家政大学創立140周年記念シンポジウム「裁縫雛形が語る女性の学びと装い」

日 時 11月6日(土) 13:00～15:30

開催方法 オンライン開催 (Zoomウェビナーによるリアルタイム配信)

参加人数 86名

概要 今年度の博物館講座は、特別企画展「東京家政大学創立140周年記念 裁縫雛形と自主自律の教え」の関連イベントを兼ね、同展の会期中に行った。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、Zoomウェビナーによるリアルタイムでのオンライン開催とした。

第1部基調講演では、近現代日本における学校制服の変遷および女性の衣生活の変容について詳しい、お茶の水女子大学の難波知子氏を迎え、裁縫雛形が製作された時代の女子学生の有り様をお話いただいた。第2部は、創立140周年を機に博物館が立ち上げたプロジェクト「裁縫雛形研究」の報告会として、研究に携わった3名の本学教員が研究成果を発表した。裁縫雛形研究は、①自校史研究の促進、②収蔵資料の利活用、③研究成果の可視化・体系化および発信等を目的としている。

第1部 基調講演「明治・大正期における女学生の装いー女袴の考案と改良を中心にー」

講師：難波知子氏 (お茶の水女子大学准教授)

第2部「裁縫雛形研究」報告会

- ・濱田仁美 (本学服飾美術学科教授)
「綿織物のバリエーションを捉える：素材・織物特性の調査・分析」
- ・杉野公子 (本学服飾美術学科准教授)
「毛織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性について：洋服雛形製作による検証」
- ・金子真希 (本学服飾美術学科講師)
「絹織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性について：和服雛形製作による検証」

まとめ 当館では初のオンライン形式でのイベント開催となった。遠方からの参加者が多く見られる等、オンラインならではの利点があった一方で、例年博物館講座に参加して下さるリピーターの参加がほぼなく、広報や開催方法を工夫する必要性を感じた。

第2部「裁縫雛形研究」報告会のYouTube動画を当館ホームページで公開しており、アーカイブ化することで今後の活用も見込まれる。

東京家政大学創立140周年記念シンポジウム
「裁縫雛形が語る女性の学びと装い」

2021年11月6日(土) 13:00～15:30
一般の方も無料でご視聴いただけます

開催方法：オンライン開催 (Zoomウェビナーによるリアルタイム配信)
視聴方法：事前登録制 当館HP「イベント」ページより登録を行ってください。
(URL: https://www.tokyo-gaiass.ac.jp/academia/museum/event/about_exhibition.html)
受付開始：2021年10月22日(金)10:00～ 定員：(500名)に達した時点で終了

タイムテーブル

13:00 開会 [開会の挨拶、趣旨説明]	基調講演 講師プロフィール 難波 知子 お茶の水女子大学基盤研究院人文科学系 生活科学部人間生活学専攻准教授
--- 第1部 基調講演 ---	
13:10-13:50 難波知子氏 (お茶の水女子大学准教授) 「明治・大正期における女学生の装い ー女袴の考案と改良を中心にー」	主な研究テーマは、近現代日本における学校制服の変遷および女性の衣生活の変容について。主な著作に、『学校制服の文化史ー日本近代における女子生徒服装の変遷』(南元社、2012年)、『近代日本学校制服図録』(南元社、2016年)がある。
--- 第2部「裁縫雛形研究」報告会 ---	
14:00-14:10 趣旨説明及び令和3年度テーマ「生地」について	
14:10-14:25 濱田仁美 (本学服飾美術学科教授) 「綿織物のバリエーションを捉える ー素材・織物特性の調査・分析」	裁縫雛形は、明治から昭和時代にかけて裁縫の練習のために製作された、衣服や生活用品等のミニチュアです。本学の校前 渡瀬辰右衛門が考案した裁縫教習法のひとつであり、材料が揃わずでも、短期間で多種多様な衣服の作り方を学べる方法として教育界の注目を集めました。
14:25-14:40 金子真希 (本学服飾美術学科講師) 「毛織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性について：洋服雛形製作による検証」	「高麗雛形研究」は、自校史研究の促進、収蔵資料の利活用、研究成果の可視化・体系化および発信等を目的としています。
14:40-14:55 杉野公子 (本学服飾美術学科准教授) 「毛織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性について：洋服雛形製作による検証」	
15:00-15:25 意見交換・質疑応答	
15:30 閉会	

東京家政大学博物館

チラシ

3. 利用状況

各月の開館日数と入館者数

令和3年度 入館者数集計

企画展「ふしめの儀式」

令和3年5月13日～6月16日

特別企画展「裁縫雛形と自主自律の教え」

令和3年11月4日～12月9日

月	企画展						常設展					
	一般	教職員	学生	附属	計	開館日数	一般	教職員	学生	附属	計	開館日数
4	-	-	-	-	-	-	1	13	41	0	55	14
5	15	49	225	2	291	13	3	34	71	223	331	17
6	6	64	310	128	508	12	5	38	207	84	334	22
7	-	-	-	-	-	-	7	14	20	0	41	15
8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
9	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
10	-	-	-	-	-	-	4	22	18	2	46	21
11	31	76	336	20	463	18	14	26	58	35	133	20
12	14	57	275	0	346	7	9	20	62	0	91	17
1	-	-	-	-	-	-	1	8	20	0	29	8
2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	66	246	1,146	150	1,608	50	44	175	497	344	1,060	134

	一般	教職員	学生	附属	計	開館日数
企画展計	66	246	1,146	150	1,608	50
「ふしめの儀式」	21	113	535	130	799	25
「裁縫雛形と自主自律の教え」	45	133	611	20	809	25
常設展合計	44	175	497	344	1,060	134
入館者合計	110	421	1,643	494	2,668	-

*令和3年度も令和2年度に引き続き、学内限定公開とした。

授業・団体見学対応

授業対応：自校史教育

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、実施せず。

授業対応：企画展展示解説

講義室において、企画展の展示品解説や展示環境などについて解説。

展示室内における解説は新型コロナウイルス感染拡大予防のため、実施せず。

月日	学科・科(学年)	授業名
12月6日	教福(1)	博物館概論
12月8日	服美(3、4)	専門ゼミⅠ、ゼミⅡ

団体対応

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、実施せず。

4. 寄贈資料・図書

令和3年度受入資料・図書〈令和3年4月1日～令和4年3月31日〉

資料

寄贈者	品名	数量
藤田 真理子	コンビネーション 他	3
(匿名希望)	三つ揃スーツ	1
吉田 弘子	裁縫雛形 他	11
鈴木 佳能子	着物・袴	2
上野 己美子	着物 他	25
碓井 徹	家計簿 (31冊)	1
長崎 巖	東京2020 ボランティアユニフォーム	14
佐々木 きみ枝	着物 他	7
塩川 美恵子	大島紬	1
谷中のご屋根会	リボン見本帳 他	18

(敬称略)

図書

寄贈者	品名	数量
青木 寿史	渡辺女学校学則	1
関 智子	図録	1
長崎 巖	図録	1
成田 亮子	卒業アルバム	1
宮方 美和子	学生手帳 他	6
東京美術	書籍	1
杉山 幸恵	書籍	1
関市立篠田桃紅美術空間	書籍	1
加藤 和子	書籍	4
鎌田 智子	写真 他	9
若槻 昌子	写真	3
義江 絹子	卒業証書 他	3
野町 信彦	卒業アルバム 他	29
戎井 久子	写真	12
西角井 錦子	卒業アルバム 他	11
井上 行子	アルバム 他	4
谷中のご屋根会	書籍	79

(敬称略)

5. 資料特別利用

資料等特別利用〈令和3年4月1日～令和4年3月31日〉

	申請者	種別	資料名	展示名・出版物名等	展示期間・発行日
学外	共立女子大学博物館	資料展示 写真使用	デイ・ドレス 1900年代	特別展「ベルエポックからモダンへ」	令和3年6月30日～8月23日
	(個人)	熟覧 写真撮影	打掛 他 11点	調査研究	令和3年5月28日
	日本経済新聞社	写真撮影 写真使用	リボン見本帳	日本経済新聞5月23日朝刊	令和3年5月23日
	泉屋博古館	資料展示	浴衣 5点	展覧会「ゆかた 浴衣 YUKATA」	令和3年6月5日～7月19日
	大正大学出版会『地域人』編集部	写真撮影 写真使用	リボン見本帳	『地域人』72号	令和3年8月10日
	朝日新聞社 企画事業本部	資料展示 写真撮影 写真使用	婚礼衣装 他 13点	展覧会「寿ぎのきもの ジャパニーズ・ウエディングー日本の婚礼衣装ー」	令和3年10月16日～11月14日 (そごう美術館会期)
	中日新聞東京本社	写真撮影 写真使用	リボン見本帳	東京新聞7月28日朝刊	令和3年7月28日
	株式会社インファス・ドットコム	写真使用	文官大礼服 他 33点	BSテレビ東京「ファッション通信」	令和3年9月18日
	株式会社サンエムカラー	写真使用	婚礼衣装 4点	展覧会「寿ぎのきもの ジャパニーズ・ウエディングー日本の婚礼衣装ー」オリジナルグッズ制作・販売	令和3年10月16日～11月14日 (そごう美術館会期)
	幻冬舎メディアコンサルティング	写真使用	婚礼衣装 12点	書籍『花嫁着付け師という仕事』	令和3年11月17日
	文部科学省初等中等教育局	写真使用	錦絵「教育誉之手術」他 11点	文部科学省著作教科書『服飾文化』	令和3年9月30日
	谷中のご屋根会	写真使用	『裁縫と家事』昭和6年第29号	webサイト「月刊のこぎり屋根」	令和3年10月1日
	板橋区立郷土資料館	資料展示 写真使用	雛形尺	コレクション展「東京家政大学140周年記念展 板橋に残る裁縫雛形ー女性の自立を支えた女子教育」	令和3年10月19日～令和4年1月30日
	読売新聞東京本社文化部	写真使用	振袖 1点	読売新聞1月30日	令和4年1月30日
	株式会社日刊工業新聞社	写真使用	打掛 他 5点	書籍『伝統色づくり解体新書「天然染料と衣服」』	令和4年4月4日
(個人)	写真使用	裁縫雛形「改良服」	講演会スライドで使用	令和4年2月18日	
学内	家政学部服飾美術学科	写真撮影 写真使用	企画展展示室	服飾美術学科公式インスタグラム	令和3年5月18日 令和3年11月10日
	家政学部服飾美術学科 大塚 有里	写真撮影	企画展・常設展示室 (校章他)	調査研究	令和3年5月21日
	家政学部服飾美術学科 倉 みゆき	熟覧	レセプション・ドレス 1900年代	調査研究	令和3年7月26, 28, 29日
	家政学部服飾美術学科 濱田 仁美	写真使用	裁縫雛形「蚊帳」	卒業研究	令和3年12月16日
	家政学部服飾美術学科 杉野 公子	写真撮影 写真使用	教授細目 他	調査研究	令和4年3月7日

申請順

6. 展示・講座等への協力

展示・講座等への協力

	日程	依頼機関・派遣先等	内容	派遣者等
学外	6月	繊維学会	学会誌『繊維学会誌』連載 「繊維関連の美術館・博物館」執筆	高橋 佐貴子
	9月22日 11月26日	共立女子大学博物館	特別展「ベル・エポックからモダンへ」作品展示・撤収	三友 晶子
	10月13日 ～15日 11月15日・ 16日	朝日新聞社・そごう美術館	展覧会「ジャパニーズ・ウエディング」作品展示・撤収	高橋 佐貴子
	1月11日	静岡県牧之原市・大澤寺	所蔵品(打敷)調査	鈴木 理子
学内	5月17日	東京家政大学家政学部服飾美術学科	ゼミナールⅠ 裁縫雛形解説	三友 晶子
	6月16日	東京家政大学家政学部教育福祉学科	基礎ゼミナール 社会教育施設としての博物館解説	三友 晶子
	11月18日	東京家政大学家政学部服飾美術学科	博物館教育論 博物館と教育普及についての解説	三友 晶子
	11・12月配信	東京家政大学家政学部服飾美術学科	民族服飾論(オンデマンド) 収蔵品民族衣装解説	高橋 佐貴子 三友 晶子

7. 資料保存・修復

資料保存のための環境整備(温湿度管理、虫菌害対策等)として、収蔵庫の清掃、燻蒸、昆虫調査等に取り組んでいる。
また、損傷や劣化の激しい資料については、必要に応じて安定化処理や修復を行う。

資料保存

日程	内容
毎月1日	収蔵庫清掃
5月7～20日	昆虫調査・同定分析
10月7～20日	昆虫調査・同定分析
2月2,3日	収蔵庫防虫剤入替

資料修復

今年度は実施なし

8. 博物館実習

令和3年度 博物館実習生の受入

学科別の受入人数

服美	表現	教福	合計
23	40	8	71名

以下の実習・課題を履修・提出し、実習が終了する。ただし、新型コロナウイルスの感染拡大予防の観点から、一部オンラインによる講義の実施、また対面実習の欠席者に対しては振替課題で対応した。

1. 実務実習A 令和3年4月19日(月)～ オンデマンド配信開始
令和3年5月18日(火)～6月10日(木)のうちの3日間
実務実習B 令和3年9月7日(火)～9月10日(金)のうちの3日間
2. 課題提出(全7課題)
課題レポート① 「春の企画展」
課題レポート② 「秋の特別企画展」
課題レポート③ 「常設展」
課題レポート④ 実務実習A-3 事前課題
課題レポート⑤ 実務実習B-1 事前課題
課題レポート⑥ 実務実習B-2 事前課題
館園実習手帳

実習内容

実務実習A

[当館の活動について①] ※実習(オンライン:オンデマンド)

- ①「東京家政大学博物館」の紹介
- ②博物館における「展示」と「保存」
- ③和装資料の取扱いと展示

[A-1 当館の活動について②] ※実習(対面)

- ①当館の展示とコレクションについて
- ②収蔵庫見学、常設展見学
- ③ワークショップ体験「和紙で着物の雛形を作ろう」

[A-2 展示実習] ※実習(対面)

- ①展示のコンセプトを検討
- ②資料を用いた展示作業
- ③キャプション、解説文作り
- ④発表と講評



A-2 展示実習

[A-3 博物館の教育普及活動①] ※実習(対面)

- ①グループワーク(アートカード体験)
- ②鑑賞ワークショップ
- ③グループワーク(ディスカッション)

実務実習B

[B-1 梱包実習] ※実習(対面)

- ①保存と活用の観点からみる美術作品の基本的な取扱い方法
- ②陶器の取扱いと梱包作業
- ③資料借用時の調書の取り方について
- ④小型作品の梱包
- ⑤仏像の梱包



A-3 博物館の教育普及活動①

[B-2 写真实習] ※実習(対面)

- ①デジタルカメラの操作と写真の基礎
- ②博物館資料を撮影する際の注意点
- ③調書作成と写真撮影
- ④平面資料・立体資料の撮影



B-2 写真实習

[B-3 博物館の教育普及活動②] ※実習(対面)

- ①教育普及プログラムの作成
- ②プレゼンテーション、質疑応答、発表

新型コロナウイルスの感染拡大予防対策

- ・一部オンライン講義の実施
- ・対面実習の実施前後2週間の体調を記録し、実施前2週間分に関しては提出を求めた。
- ・対面実習においては、マスクおよびフェイスシールドの着用、ビニールカーテンの設置、手指・共用物品の消毒、換気等を行い、実習生と講師、職員の安全に配慮して実施した。
- ・クラウド型教育支援システムmanabaを活用し、実習生と職員の対面によるやり取りの軽減に努めた。

9. 広報・普及活動

スタンプラリーの実施

企画展・常設展・博物館講座の入館者にスタンプカードを配付

スタンプを4つ集めた方にミュージアムグッズをプレゼント。有効期限なし

ミュージアムグッズ：ステーションナリーセット

(手ぬぐい、ブックカバー、一筆箋) 3種

トートバック(6種)



ミュージアムグッズの一例

Instagram開設

令和3年2月9日より投稿開始。展示やイベント情報、コレクション紹介など、博物館が利用者にとって新たな発見や新鮮な驚きの場になるよう、さまざまな情報発信の手段として利用していく(投稿：5件)。



公式Instagram

10. 東京家政大学博物館友の会(博友会)

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、すべての活動を休止。

会員数 66名

11. 博物館の価値再創出・発信プロジェクト

令和2年度より、収藏品管理を徹底し計画的な資料収集を行うとともに調査研究を促進させ、その価値を社会に発信するため、以下の5項目について5か年計画でプロジェクトを立ち上げた。

- 1) デジタルアーカイブの作成と発信
- 2) 収藏品の調査・研究及び評価
- 3) コレクション計画の検討
- 4) 自校史研究の確立
- 5) 博物館施設・展示設備等の計画検討

令和2年度の具体的実施事項は以下の通り。

- 1) クラウド型収藏品管理システム「I.B.MUSEUM SaaS」導入（9月より）
- 2) 収藏品写真画像のデジタル化と写真撮影
- 3) 他館事例の調査（文化学園服飾博物館、共立女子大学博物館）
- 4) 学外専門家による資料調査（6日間）
- 5) 博物館の使命および資料収集方針の立案と検討（運営委員会）
- 6) 本学卒業生の学生時代に関する調査（昭和33年卒業まで）で回答のあった104件について、データ化と事実関係の精査を実施

令和3年度のおもな実施事項は以下の通り。

主にデジタルコンテンツ作成に重点を置き、博物館HPで一般に公開した。
公開中（令和4年3月31日現在）のコンテンツは以下の通り。

◇収藏品紹介

- 1) 収藏品データベース
- 2) ミュージアム展示ガイドアプリ「ポケット学芸員」
- 3) 文化遺産オンライン（文化庁運営）

◇展示解説等

R03 特別企画展「裁縫雛形と自主自律の教え」

- 1) 展示解説（動画）
- 2) 展示解説 英語字幕（動画） Special Exhibition 2021 : Saiho Hinagata and the Spirit of Independence and Autonomy (explanatory video)
- 3) バーチャル展示室（360°カメラ）
- 4) シンポジウム（動画）

R03 企画展「ふしめの儀式」

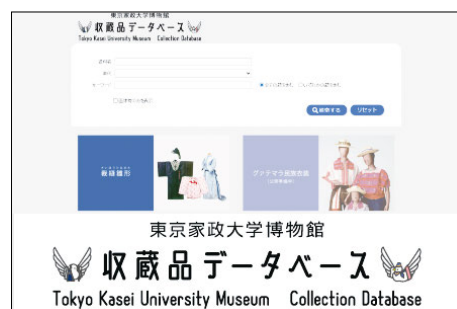
- 1) 展示解説（動画）

R02 特別企画展「きものと色ー藍と紅を中心にー」

- 1) 展示解説（動画）

常設展

- 1) 通年「裁縫雛形に見る 校祖渡邊辰五郎の教え」（動画）



デジタルコンテンツアイコン

12. 博物館運営委員会

博物館運営委員〈任期 令和2年4月1日～令和4年3月31日〉

手嶋 尚人	博物館館長、委員長
戸田 雅美	図書館館長
保坂 克二	法人
鈴木 彬子	児童学科・保育科
佐藤 康富	児童学科・保育科
半澤 嘉博	児童教育学科
岸 昌代	栄養学科・栄養科
赤石 記子	栄養学科・栄養科
杉野 公子	服飾美術学科
藤森 文啓	環境教育学科
曾根 博美	造形表現学科 *令和3年9月30日まで
トム・エドワーズ	英語コミュニケーション学科
平川 俊功	心理カウンセリング学科
宮地 孝宜	教育福祉学科
渡邊 健	附属中学校・高等学校
高橋 佐貴子	博物館

13. 博物館職員

博物館館長	手嶋 尚人
副事務長	高橋 佐貴子
主任・学芸員	三友 晶子
学芸員(嘱託)	鈴木 理子
学芸員(嘱託)	高橋 真生
学芸員(嘱託)	松本 由佳
学芸員(嘱託)	吉田 奈央
短期間等嘱託	太田 八重美

調查研究報告

令和3年度「調査研究報告」について

東京家政大学創立140周年を機に、①自校史研究の促進
②収蔵資料の利活用 ③成果の可視化・体系化および発信
を目的とし、当館の「博物館の価値再創出・発信プロジェクト」の一環として「裁縫雛形研究」を新たに立ち上げた。

令和3年度は、「裁縫雛形に使用された生地について」を
テーマに掲げ、服飾美術学科の教員と協同して、以下の3
件の調査研究を行った。

- ・濱田仁美(本学服飾美術学科教授・被服材料研究室)
研究協力：石野美伶、剣持千佳
「綿織物のバリエーションを捉える：素材・織物特性の
調査・分析」
- ・杉野公子(本学服飾美術学科准教授・服飾造形第3研究
室)、小野理佐子
「毛織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性について：
洋服雛形製作による検証」
- ・金子真希(本学服飾美術学科講師・和服造形第2研究
室)
「絹織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性について：
和服雛形製作による検証」

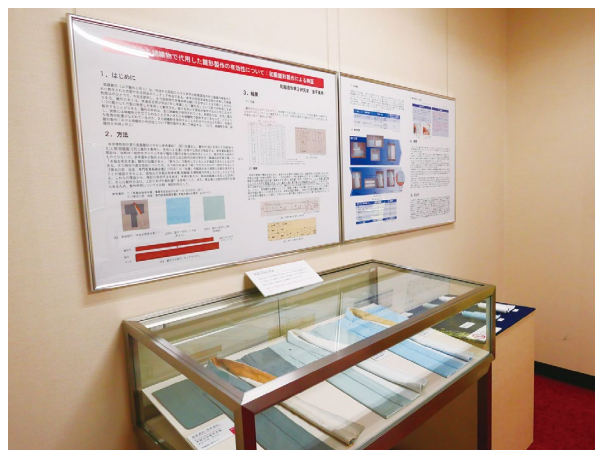
研究成果は、令和3年度特別企画展「東京家政大学創立
140周年記念 裁縫雛形と自主自律の教え」において、パ
ネルおよび製作品の展示を行うとともに(別室展示)、裁
縫雛形の展示解説として活用した。

また、企画展関連イベントとして開催した「東京家政大
学創立140周年記念シンポジウム『裁縫雛形が語る女性の
学びと装い』」において、報告会が行われた(詳細はp15)。

今回の調査研究報告では、シンポジウム「裁縫雛形が語
る女性の学びと装い」にて基調講演講師をお願いした難波
知子氏(お茶の水女子大学准教授)より寄稿された、講演
内容に加筆して新たに執筆された論文と、裁縫雛形研究の
うち、2件の論文を掲載する。

- (1) 難波知子「明治・大正期における女学生の装い—女袴
の考案と改良を中心に—」
- (2) 濱田仁美「綿織物のバリエーションを捉える：裁縫雛
形の素材・織物特性の科学的分析」
- (3) 杉野公子「毛織物を綿織物で代用した雛形製作の有効
性について：洋服雛形製作による検証」

*金子真希「絹織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性
について：和服雛形製作による検証」は学会誌投稿準備
中のため、本年報への掲載は見送った。



別室展示における展示

明治・大正期における女袴の考案と改良 —裁縫書を手がかりとして—

難波知子

Inventing and improving women's hakama in modern Japan: Tracking the process through sewing books

Tomoko Namba

1. はじめに

本稿は、2021年11月6日(土)に行われた東京家政大学創立140周年記念シンポジウム「裁縫雛形が語る女性の学びと装い」における筆者の講演内容について加筆修正したものである。シンポジウムでは、女学生の装いとしての「袴」に焦点をあてるとともに、女学生の袴が誰によっていかに考案されたのか、女袴はどのような形状・種類があるのか、さらに女袴はいかに改良・変容したのかについて報告した。本稿では、論文としては未発表の明治・大正期における女袴の考案と改良について取り上げる。これまで女袴に関する歴史研究は、女学生や女教員が着用した袴に焦点が当てられ、女学校における服装規程や着用状況、女学生像が反映された袴の象徴性などが明らかにされてきたが¹⁾、いずれも具体的な女袴の様式やそれが形成される過程については指摘してこなかった。本稿では、女袴という服飾が近代の日本においていかに形成されたのか、裁縫書を手がかりとして検証・考察を進める。

2. 誰が女学生の袴を考案したか

2-1. 女袴とは

まず、女袴が考案された歴史を振り返る前に、女性用の袴の特徴、男性用の袴との違いを確認しておきたい(以下、女性用の袴を「女袴」、男性用の袴を「男袴」と表記する)。現在、大学の卒業式などで着用される女袴は、襠²⁾のないスカート状のものが一般的である。これに対し、男袴は襠のある、すなわち左右の脚を別々に入れるズボン状である。こうした形状の違いに加え、女袴に使用される生地は紫や臙脂などの無地、男袴の生地は縞が正式とされる。このような男女の袴の違いは、明治以降の服飾変遷の中で形成され、現在まで伝わっていると考えられる。

一部の例外を除いて、前近代の日本において袴といえは男性の服飾を示した。明治初期に官立の女学校が設立され、近代的な学校に通う女学生向けに袴の着用が認められたが、その際に着用されたのは縞の男袴である。しかし男袴をそのまま着用した女学生の装いは男装と非難され、ま

お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系

もなく姿を消す³⁾。その後、女子教育制度の整備が進み、明治32(1899)年に女子中等教育機関として高等女学校が設立されると、女学生の制服として袴が普及する。このときに女学生の間に普及した袴は女袴であった。女袴は明治期に入ってから新たにつくられた服飾であるといえるが、では、女袴とはいつ誰によって考案されたのだろうか。

2-2. 女学生の袴の考案者—跡見花蹊と下田歌子

女学生の袴の考案者としては、跡見女学校(現・跡見学園中学校高校)の跡見花蹊(1840-1926)と華族女学校(現・学習院女子中・高等科)の下田歌子(1854-1936)があげられる。石井研堂の『明治事物起源』によれば、「女学生に袴あるは、跡見女学校を始めとす(略)一様に紫色の袴を用ひしめ(略)女学生の袴の海老茶色なるは、華族女学校に創まり、校長下田歌子の案なりといふ」⁴⁾とあり、女学生の袴着用の嚆矢を跡見女学校、女学生の代名詞ともなる海老茶色の袴の起源を華族女学校としている。跡見女学校は明治8(1875)年、華族女学校は明治18(1885)年に創立され、両校における袴の着用経緯については、それぞれ証言が残されている。

まず跡見花蹊は、大正2(1913)年の『風俗画報』の記事において次のように述べている。

婦人は男子とは違ひまして質素の内にも多少外観を飾らなければなりません。私は女学生の品性を高尚にすることは勿論のこと。歩行の際脚部が露出するのは余り体裁の好いものでありませぬので色々工夫を凝らしまして一見して女学生なる事を一般人に分るやうに常着の袴を考案致しました(略)古来宮中の御規定にては皇后陛下の御召使などでも総て其礼儀上必ず緋袴を着用する事になつてゐます。併し其を一般に普及するのは何んだか恐れ多い様に思いました。それかと云つて当時男子の方に流行してゐた紺小倉の馬乗袴を其のまゝ女子に流用する事は出来ませんので両者を折衷しましたのです。其仕立方はアンドンに色合は朱紺即ち紫色と定めまして。それを実行致しました⁵⁾。

上記の回想によれば、跡見花隠は宮中女性が着用した緋袴と男子の馬乗袴（いずれも襠あり、すなわちズボン状）を参照し、襠のないスカート状の「アンドン」（行燈）仕立てにしたという。色は紫が選ばれ、同校を象徴する色として定着する。しかし証言は大正2年当時のものであり、明治8年の開校時に女袴の特徴の一つである襠なしの行燈袴が考案されていたか、さらに検証が必要と思われる。

次に、下田歌子の証言が掲載された明治34（1901）年の『女教一班』（第六篇）をみていく。

従来の如き、裳袴無き衣服の、一つは、礼容に欠く所あり。一つは、体操及び、腰掛に凭るに不便なるが故なり（略）されば其頃は、嘗て後宮にて用ひさせ給へる袴（世に云ふ緋袴にして、そのかみ下の袴と云ひしもの）の製を其儘たゞ、色のみを変へて用ひ又は、男子の袴の製の如くして、僅かに腰板のみを廃せしどもを用ひ試みしも元来、一筋の紐にて結ぶ時は、やゝもすれば、緩み易く、又後ろもゆがみ易き等の嫌ひあり。（緋袴は、一筋の紐を前後に廻して着く）且つ、幼き女兒には、まちある袴は、甚だ不便を感ずる事もあり。冬季は、自つから、裾まくれあがりて、寒さを覚ゆる等万づに便りよからざりしが為に、遂に、男子の指貫袴の製作を折衷して、先づ紐は二筋とし、之を前後に分ち着け、まちを除きて、ひだを多くし、往古の裳の製を参酌して今の如き、一種の袴は製したるなりき⁶。

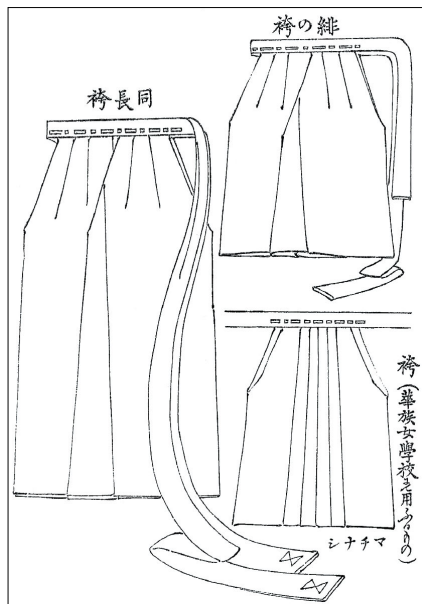


図1 華族女学校の「マチナシ」袴
（下田歌子『家政学』上巻、博文館、1893年）
国会図書館デジタルコレクション

華族女学校ではいくつかの試みを重ねた後に、襠なしの女袴にたどり着いたことが窺える。当初は緋袴の色だけを変えた袴が試みられたが、腰紐が前後にわたり一本で仕立て

られた袴はゆるみやすかった。また腰紐が前後に一本ずつある男子の袴の腰板を廃し用いてみたものの、幼い女兒にとって襠のある袴は、袴の内側で着物の裾がまくれあがる不便があった。そこで、緋袴と男子の指貫袴⁷と唐衣裳装束の裳⁸を折衷し、袴の腰紐を前後に一本ずつ付け、襠がなく、襷を多くした袴が考案された。この女袴の考案時期は分からないが、明治26（1893）年に著された下田歌子の著書『家政学』（上巻）⁹に、華族女学校の「マチナシ」袴の図が掲載されることから、明治20年代半ば頃には襠なしの女袴の形状が整えられていたといえよう（図1）。

3. 裁縫書にみる女袴の形成

3-1. 女袴の種類と様式

ここで東京裁縫女学校（現・東京家政大学）の明治38（1905）年の裁縫教授細目にある女袴を確認してみると、「実物女袴」「雛形女袴」とも次の8種類の女袴が教授細目として掲げられている。「小裁三ツ稜」「小裁大門腰」「中裁三ツ稜」「中裁大門腰」「本裁三ツ稜」「本裁大門腰」「本裁襠有七ツ稜」「改良袴」である¹⁰。「小裁」は乳幼児用、「中裁」は子ども用、「本裁」は大人用を表すが、それ以外に女袴の後ろ襷の数によって様式が区別されている。「三ツ稜」は後ろ襷が三つ、「大紋腰」は後ろ襷が一つ、「七ツ稜」は左右の筐襷¹¹と後ろ五つ襷を合わせた七つ襷を表す¹²。また大人用の女袴にのみ「襠有」があり、その他はすべて襠なしである。すなわち、女袴には襠の有無および後ろ襷の数により、いくつかの種類が派生している。なぜ女袴の様式にこのようなバリエーションが生れたのだろうか。

3-2. 裁縫書にみる女袴の記載内容

そこで次に裁縫書に女袴が登場してくる時期とその内容を確認し、女袴の様式の違いにどのような意味があったのかを探ってみたい。ここでは国会図書館デジタルライブラリーで閲覧可能な明治から昭和初期までの裁縫書244冊を参照した（文献リストは紙幅の関係上省略）。

まず初めて裁縫書に女袴が確認できたのは、管見の限り、明治24（1891）年に刊行された木村小三郎『和服裁縫集合早見徳本』に掲載された「當十才女袴」である。小学生に当たる女兒向けの袴として、女袴の裁ち方と寸法が記載され、「女子ノ袴ユエマチナシ」との記載が確認できる¹³。明治20年代前半にはすでに「女袴＝襠なし」との認識が定着していることが窺える。

次に渡邊辰五郎が著した裁縫教科書における女袴をみていく。女袴についての記載が確認できるのは、明治30（1897）年の『裁縫教科書』巻之三である。ここには「五六才ノ女兒ノ襠ナシ袴」「七八才ノ女兒ノ襠ナシ袴」「十一二才ノ女兒ノ襠ナシ袴」「大人ノ襠アリ袴」「女襠ナシ袴」がそれぞれ布幅ごとに示されている¹⁴。子ども向けには襠な

しの袴のみ、襦ありの袴は大人向けとなっている。女袴の襷数に関しては、前が七つ襷（笹襷含む）に固定され、後ろは一つ襷（大門腰）、三つ襷、七つ襷（笹襷含む）とすべてのバリエーションが出揃っている。同時期の他の裁縫書をもても、同様の女袴の種類が示されている（図2）。

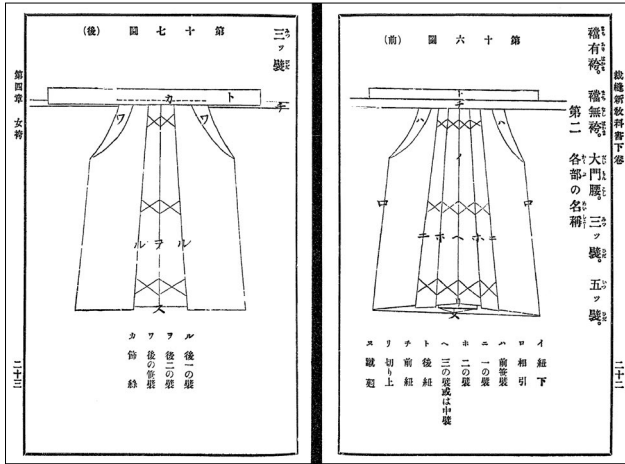


図2 女袴の種類と各部名称
（前田とみ子他『家庭裁縫新書』自省堂、1905年）
国会図書館デジタルコレクション

女袴の様式が定型化されるまでの過程が窺える裁縫書の記述を拾ってみると、襦の有無については「女袴は、多く襦をつけず」（明治35年）¹⁵「近来は主に襦ナシを着す」（明治43年）¹⁶などが確認でき、明治30年代には襦なしの女袴が主流である。襦ありの女袴はそれ以前に着用例があったと推測されるが、明治30年代以降の裁縫書に掲載され続けることや東京裁縫女学校の教授細目に組み込まれていることなどから、何らかの場面や用途において襦ありの女袴が選択・着用されることがあったと思われる。

また女袴の後ろ襷の数については、「後三つ襷とは後襷の三つある物を云ふ、現今多く用ひらるゝ物なり」（明治41年）¹⁷、「前のひだは五つにきまつてゐるが後は三つひだが普通」（昭和2年）¹⁸、「近来大紋腰は殆ど用ひられなくなつた」（昭和14年）¹⁹などの記述が確認でき、女袴の後ろ襷は、一つ襷（大門腰・大紋腰）が徐々に廃れ、三つ襷が主流となっていく様子が窺える。後ろ一つ襷は、男性の袴と同じ様式であり、女袴が形成される過程で男袴に準じた様式が採用されたものの、次第に差別化が進行していく。

さらに女袴の後ろ一つ襷については、「後を、一つ襷と為したるも、扱ひ上、便利なれば、小裁、或は、常用には、可なり」（明治35年）²⁰という記載がみられ、後ろ一つ襷には利便性があったことがわかる。この利便性とは袴の仕立てにおける襷の製作面、あるいは着用後の管理面（襷のメンテナンス）や着用時の動作面などが考えられる。加えて、一つ襷は子ども用もしくは日常用の着用を

可とするとあり、大人の女性及び儀礼的な場面には向かないと受けとれる。一つ襷は男性の袴と同じ形式であり、男性的要素を感じさせ、子どもと日常着には認められても、大人の女性が正式な場面で着ることは憚られたのだろうか（図3）。



図3 本裁大門腰女袴の雛形（後ろ一つ襷）1912年
東京家政大学博物館所蔵

しかし後に東京女子高等師範学校の裁縫教員となる成田順の学生時代の回想によれば、明治35（1902）年に成田が京都府師範学校女子部に入學した際には、後ろ一つ襷の襦なしの女袴（木綿）が穿かれた。その後、女子高等師範学校に進学すると、後ろ三つ襷の襦なし女袴（セルカカシミヤ）が穿かれるが、両校の服装規程を比べると、京都府師範学校女子部の方が厳格な服装規程であったようだ²¹。後ろ一つ襷の女袴は仕立ての際、使用する布の分量が少なく済み、質素さをより強調する服装であったと思われる。

このように裁縫書や当時の証言からは、女袴の後ろ一つ襷に関して子ども用、日常用、質素さなどの意味合いを読み取ることができるが、その後徐々に影を潜めていく。

3-3. 模様を施した袴地の試み

続いて、裁縫書と新聞記事から読み取れた女袴の定型化過程における袴地や装飾の試みをみていきたい。東京裁縫女学校の校祖である渡邊辰五郎の遺稿をまとめた『渡邊裁縫講義（高等部）』（明治43年）によれば、女袴には「裾口に染模様をなし、又は種々の模様を縫付くるもあり。又、後紐の飾りにも、太白糸を用ゐずして、裾と同様に刺繍を施すもあり、又、リボンを用ゐるもあり」²²と袴に染めや刺繍による模様付け、装飾が施されていたことが窺える。

女袴の後ろの腰紐には、太く白い糸で二目落としの模様が付けれられていたが、これは緋袴や唐衣裳装束の裳に施された装飾に由来していると考えられ、下田歌子が考案した女袴の図(『家政学』上巻)にも確認できる。東京裁縫女学校では二目落としに加えてさらに刺繍の装飾を施したが、新聞記事によれば「余り流行せず終つた」²³⁾とされる(図4)。二目落としの白線は学校を表すような特定の意味をもたなかったが、高等女学校では袴の裾や後ろの腰紐に学校を示す白線を付ける場合もあった。



図4 袴の後ろの腰紐に施された刺繍装飾(渡邊辰五郎『婦人改良服指南』東京裁縫女学校同窓会、1903年) 国会図書館デジタルコレクション

さらに新聞記事によれば、明治37(1904)年頃に三越と伊勢丹で花や蝶の染め模様を施した袴地を売り出したが、あまり売れ行きがよくなかったこと、また東京裁縫女学校でアルパカ地に「浪に千鳥」の模様を刺繍で表現した袴地と思われる標本が製作されていた様子とともに、女子高等師範学校の教員の間でも刺繍を施した袴が穿かれたが、あまり流行しなかったことが伝えられる²⁴⁾。現在、卒業式で女子大学生が穿く袴には模様入りのものが普及しているが、当時であってはあまり好まれなかったようである。少し時代は下るが、昭和10(1935)年の裁縫書には「柄はなくて無地物がよい。袴は縞及模様の長着又は羽織の上に着するのであるから、無地が上品でまとまりがある」²⁵⁾と無地の袴地が推奨されている。

以上のように袴地に模様を施した女袴の実践がみられたものの、主流とはならず、無地が女袴の定型となっていく。ここまで裁縫書を手がかりに、女袴にいくつか種類があったこと、襷なし・後ろ三つ襲に定型化される過程をみてきたが、裁縫書に記される情報は少なく、さらに具体的な証言を加えて検討を重ねることを今後の課題とする。

4. 女袴の改良—スカート状からズボン状へ

4-1. 渡邊式改良女袴

女学生に袴が普及した背景には、一つには運動の奨励があった。着流しの着物に比べ、下半身を覆う袴は脚部の露出を防ぎ、より活発に動き回ることを可能にした。しかし足首まである長い丈の袴は足さばきが悪く、さらなる機能性向上を目指した改良袴が登場する。

2代目の東京裁縫女学校長となる渡邊滋は「渡邊式改良女袴」を考案している。明治35(1902)年に留学先のアメリカで「スウェーデン式体操スカート」を見たことがきっかけであった²⁶⁾。このスカートはスウェーデン体操を行う際に着用された女子体操服と思われるが、同じ頃アメリカ・ボストンに留学していた女子高等師範学校の井口阿くりがこの体操服を日本に持ち帰っている。上衣にはセーラー衿が付き、下衣はブルーマーである。平常はブルーマーの上にスカートを穿くが、運動時にはスカートを脱ぎ、ブルーマーの裾口を縛って着用する(図5)²⁷⁾。渡邊滋はこの女子体操服にアイデアを得て、通常は襷なしの女袴として着用し、運動時には中央の切れ込みに付けたボタンを留め替えてズボン状に改変できる改良袴を考案した。



図5 セーラー・ブルーマー型女子体操服(井口阿くり他『体育之理論及実際』国光社、1906年)

また明治42(1909)年10月には「渡邊式改良女袴」として特許が申請され、翌43年2月に認められている(図6)²⁸⁾。これを受けて、明治43年9月発行の『みつこしタイムス』の付録に広告が掲載された(図7)²⁹⁾。広告には三越で販売された生地・サイズ別の定価が掲載されるとともに、専売権使用ネーム貼付の注意書きがある。渡邊式改良女袴を真似た類似商品の販売を阻止したい狙いがあったと思われる。この専売権使用ネームに関しては、東京家政大学博物館に

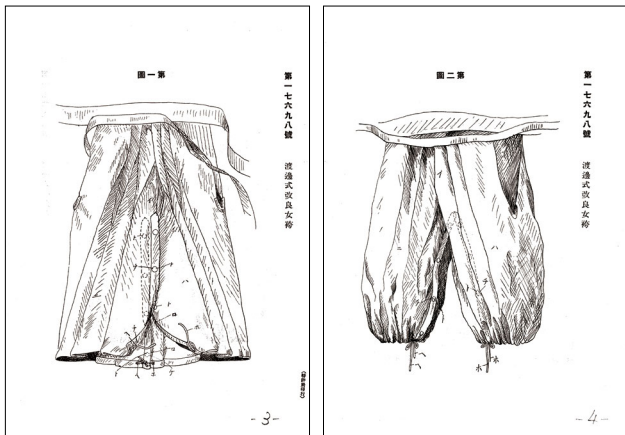


図6



図7



図8



図9

図6 「渡邊式改良女袴」の特許明細書（特許第18698号）
特許情報プラットフォーム（J-PlatPat）

図7 「渡邊式改良女袴」の付録広告（『みつこしタイムス』8巻
10号、1910年9月）個人蔵

図8 雛形に貼付された専売権使用ネーム（明治44年3月に卒業
した生徒の製作品）東京家政大学博物館蔵

図9 「渡邊式改良女袴」の付録広告の裏面（『みつこしタイムス』
8巻10号、1910年9月）個人蔵

寄贈された雛形の中に、その存在を裏付ける資料がある。専売権使用ネームの字体とその周囲に施された薔薇と思われるモチーフは、『みつこしタイムス』の広告の裏面に印刷されたイラストと類似している（図8）³⁰。広告の裏面には、渡邊式改良女袴の特許番号とともに、従来の袴と比較していかに改良袴が有用であるかが図示されている（図9）。この『みつこしタイムス』の付録広告は、今回新たに発見した資料である。特許の申請および専売権使用ネームの貼付は、渡邊式改良女袴のオリジナリティを守ろうとする意志が感じられるが、その後大正2（1913）年には「渡邊式改良女袴製法」が東京裁縫女学校出版部によって刊行されている。この冊子が何部印刷され、どの程度頒布されたかはわからないが、「和製ブルマー」とも異名がつく改良袴は、高等女学校の女学生たちに着用されたことが確認できる。

4-2. 高等女学校における「括り袴」の着用

萩原美代子氏の研究によれば、大正4年頃から「括り袴」と呼ばれる裾口を紐で縛り、ズボン状に改変できる女袴が着用されたことが指摘されている³¹。筆者の調査でも全国各地の高等女学校で着用されたことが確認できている。例えば、秋田県の能城高等女学校では、大正6（1917）年に「括り袴」と翌年に体操帽の着用が定められている³²。兵庫県の姫路高等女学校でも大正6年に筒袖と「括り袴」の着用が決められた³³。両校とも履物には古足袋や「ジカ足袋」が合わせられ、袴以外にもより活発な運動ができるスタイルへと変更が加えられている。

「括り袴」という用語自体がどのように現れてきたのか、また渡邊式改良女袴とどのような関係にあるかについてはさらなる検討が必要であるが、襠なしのスカート状の袴をズボン状の袴に改変できる渡邊滋のアイデアは広く参照され、当時の女学生の運動スタイルの形成に大きな影響を与えたと考えられる。

以上みてきたように、女袴は襠なし袴として定型化されるが、機能性の観点から改良が施され、一部の女学校では体操の時間に「括り袴」が着用された。この後、高等女学校では体操服や制服に洋装を導入するところが増えてくる。改良袴の着用期間はそれほど長くなかったものと思われるが、手持ちの袴に工夫を凝らすことで機能的な袴の装いができる渡邊滋のアイデアは、洋装をすぐに取り入れられない地域の女学校などでは重宝されたのではないだろうか。

5. おわりに

女袴は明治期に入ってから考案された近代の産物といえる。その考案に際しては、宮中女性の服飾や男性の袴などが参照された。また女学生の間で流行した海老茶袴の生地には舶来のカシミアが使用され、その染色には化学染料が用いられたと考えられる。女袴の形成過程や構成要素をみていくと、在来の男女服飾様式の折衷に加え、近代的な外来文化とも融合して作り出されていることがわかる。さらに「女袴」が出来てから「男袴」という用語も裁縫書に登場し、それまで「馬乗袴」と呼ばれていた武士男性の袴が日本人男性の儀礼服へと変貌を遂げていく。本報告では詳細は取り上げられなかったが、男性の行燈袴（襠なし）も明治期になってから登場し、男女とも襠あり・襠なしの袴の様式を有しつつ、TPOに合わせて選択・着用されたと思われる。女袴の歴史的な検討を通して、和服文化の創造・再編の様子がつぶさにみてとれるとともに、男女の服飾様式の接近と乖離、服飾に表れるジェンダーの問題も考えることができる。特に、襠ありの女袴を誰がどのような場面、用途で着用したのかについて、さらなる事例検証を行い、女性の脚衣をめぐる社会的背景および社会的反応を考察することを今後の課題としたい。

謝辞

本研究の一部は、JSPS 科研費 JP20K02361 の助成を受けたものである。

註

- 1) 主な先行研究として、佐藤秀夫「学校における制服の成立史」（『日本の教育史学』19集、1976年）、蓮池義治「近代教育史よりみた女学生の服装の変遷（一）」（『神戸学院女子短期大学紀要』10号、1978年）、岩崎雅美「明治後期小学校女子教師の服装について一裳袴・筒袖を中心にして一」（『日本家政学会誌』44巻1号、1993年）、横川公子「女性と袴（二）海老茶式部の形成」（『金蘭短期大学研究誌』24号、1993年）などがあげられる。
- 2) 襠とは、「袴の内股の部分に足した布」を指す（『広辞苑』第七版、岩波書店、2018年）。
- 3) 横川公子「女性と袴（一）男袴の受容」『金蘭短期大学研究誌』23号、1992年。
- 4) 石井研堂「女学生の袴」、明治文化研究会編『明治文化全集 別巻 明治事物起源』日本評論社、1993年。なお、引用に際して、漢字の旧字体は新字体に改めた（以下同様）。
- 5) 跡見花蹊「婦人と風俗」『風俗画報』443号、1913年。
- 6) 下田歌子「本校にて用ふる袴の起因及び製作」、細川潤次郎編『女教一班』第六篇、華族女学校、1901年。

- 7) 指貫袴は、直衣や狩衣の装束に用い、裾口に通した紐を絞って着用する（東京家政大学博物館編『裁縫雛形 渡辺学園裁縫雛形コレクション』光村推古書院、2019年）。
- 8) 裳は、装束の後方だけを覆う女性の正装を構成する装飾的な服飾である（同上）。襷が多くとられている。
- 9) 下田歌子『家政学』上巻、博文館、1893年。
- 10) 『重要有形民俗文化財 渡辺学園裁縫雛形コレクション』上巻、東京家政大学博物館、2001年。
- 11) 笹襷とは、袴の左右の脇明に付けられる笹型の襷。
- 12) 渡邊辰五郎『裁縫教科書』巻之三、東京裁縫女学校、1897年。
- 13) 木村小三郎『和服裁縫集合早見徳本』北川太平、1891年。
- 14) 渡邊辰五郎前掲書。
- 15) 喜多見佐喜子『新撰裁縫教授書』東洋社、1902年。
- 16) 広川梅編『織田流袴裁縫全書』広川女子技芸学習部、1910年。
- 17) 寺田五三子『日本の裁縫』上巻、盛林堂、1908年。
- 18) 結城親学『中等和洋裁縫教科参考』文祥社、1927年。
- 19) 京都高等手芸女学校裁縫研究会編『和裁全書』後編（訂正2版）、1939年。
- 20) 錦織竹香『普通裁縫教科書』（付録増訂）同文館、1902年。
- 21) 成田順『被服教育六十年の回顧』真珠社、1974年
- 22) 渡邊滋『渡邊先生遺稿 渡邊裁縫講義』高等部、東京裁縫女学校、1910年
- 23) 「女の袴（上）」『東京朝日新聞』1908年3月4日。
- 24) 「女の袴（下）」『東京朝日新聞』1908年3月8日。
- 25) 『高等小学裁縫科指導細案』家事及裁縫社、1935年。
- 26) 渡邊滋『渡邊式改良女袴製作法』東京裁縫女学校出版部、1913年。
- 27) 井口阿くり他『体育之理論及實際』国光社、1906年。
- 28) 特許第17698号「渡邊式改良女袴」。特許の明細書は特許情報プラットフォーム（J-PlatPat）より閲覧できる。なお、東京家政大学博物館では、令和2（2020）年の常設展示においてこの特許の明細書をパネル展示している。
- 29) 『みつこしタイムス』8巻10号付録、1910年9月。
- 30) 図8の専売権使用ネームの付いた雛形は、平成30（2018）年に東京家政大学博物館に寄贈されたものである。この雛形の存在およびネームのデザインと広告裏面のイラストの類似は、シンポジウム後に本報告をまとめる過程で、同博物館の三友晶子氏のご教示により判明した。
- 31) 萩原美代子「女子運動服の変遷一洋服の導入をめぐる」『女子体育』19巻7号、1977年。
- 32) 秋田県立能代北高等学校『創立七十周年記念誌』1984年。
- 33) 「姫路高女校の筒袖制度」『婦女新聞』909号、1917年10月19日。

綿織物のバリエーションを捉える —裁縫雛形の素材・織物特性の科学的分析—

濱田仁美

Variations in cotton fabrics used in saiho hinagata (miniatures made as sewing practice): Scientific analysis of materials and physical properties

Hitomi Hamada

1. はじめに

裁縫雛形（以下、雛形）とは明治から昭和の裁縫学校等の教育課程の中で、裁縫の練習のために学生たちが製作した、実寸法の約1/3サイズの衣服等のミニチュア作品である。東京家政大学博物館には、明治30年頃から昭和18年までに製作された約5000点が所蔵されており、このうち2290点が重要有形民俗文化財に指定されている¹⁾。

雛形に関する過去の研究では、当時の記録簿等の文献を基に、文献調査から雛形の基礎データを構築する内容のものが多く²⁾⁴⁾、科学的・実証的な調査を行っている研究は少ない。雛形は基本的に綿製であると考えられているが、実際の触感や外観から綿製ではないと考えられる雛形も存在する。これらの雛形の素材について、これまで科学的な分析は行われておらず、科学的根拠に基づいた素材の同定は行われていない。

そこで本研究では、東京家政大学博物館所蔵の雛形9点について、非破壊分析により素材の同定を試みた。また、多くは綿織物から製作されている可能性が高い雛形であるが、綿とは異なる触感や外観を有する素材もあり、それらの素材の同定や加工方法を解明する。

2. 実験

2-1. 資料

素材の同定を行う雛形資料は、表1に示す9種類とした。

表1. 雛形資料

名称	製作年度	材質	材質の外観
陣羽織1	明治38年	絹	絹ライク
陣羽織2	明治38年	毛	毛ライク
陣羽織3	明治38年頃	綿	毛ライク
本裁女物単本重	大正11年頃	綿	綿ライク
ゼレニーディスカート	明治38年頃	綿	毛ライク
蚊帳	大正5~6年	綿	麻ライク
袍	明治38年	綿	絹ライク
表着	明治38年頃	綿	絹ライク
二枚重(下着)	大正8年	綿・絹	絹ライク

東京家政大学家政学部服飾美術学科

表1に示す製作年度と材質は、雛形の記録簿に記載されているものである。陣羽織3種類については、表布(白色部・ベージュ色部)の材質を示している。材質の外観は、どのような素材に見えるかを「○○ライク」という表現で示している。図1に各資料の外観を示す。



図1. 雛形資料の外観

(*画像提供: 東京家政大学博物館)

2-2. 表面観察と物性測定

雛形の素材(材質)の同定を行うため、非破壊分析により、雛形の分析を行った。繊維の同定は、燃やす、溶かす、裁断して観察する等の破壊分析を行うことで、明確に同定が可能となることが多い。しかしながら、本研究における調査対象の雛形資料は、重要有形民俗文化財を含み、全て貴重な作品であるため、非破壊分析のみで同定を試みた。

2-2-1. 表面観察

光学顕微鏡(デジタルマイクロスコープ, MS-200, (株)朝日光学製作所製)を使用して、雛形資料の表面を観察した。低倍率(60倍)で素材の織構造を観察し、高倍率(1,500倍)で繊維の形状を観察した。また、光学顕微鏡で判別不可能であった資料(二枚重)についてのみ、走査型電子顕微鏡(SEM, TM3030, (株)日立ハイテクノロジーズ製)を使用して高倍率(1,000倍)で観察を行った。あらかじめ同定のため、絹、毛、綿、麻、レーヨンの各繊維についても、走査型電子顕微鏡を用いて撮影した。

2-2-2. 摩擦特性

図2に示す摩擦感テスター(KES-SE, カトーテック(株)製)を用いて平均摩擦係数(MIU)を測定した。MIUは素材の滑りやすさを示す特性値である。荷重50 gf、測定距離2 cm、試料移動速度0.1 cm/sの条件で測定を行った。資料1種類につき、たて方向・よこ方向にそれぞれ4回ずつ測定を行い、その平均値を算出した。

2-2-3. 接触冷感

図3に示す精密迅速熱物性測定装置(KES-F7, カトーテック(株)製)を用いて、各資料表面の接触冷感評価値(q_{max})を測定した。測定は各資料3回ずつ行い、平均値を算出した。接触冷感評価値は触った瞬間の熱移動量の最大値を測定し、素材の接触冷感(ひんやり感)を評価する指標である。値が大きいほど冷感が大きいことを示す。



図2. 摩擦感テスター

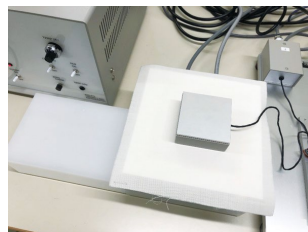


図3. 精密迅速熱物性測定装置

3. 結果と考察

3-1. 各繊維の形状

雛形の素材(材質)の同定を行うに辺り、あらかじめ走査型電子顕微鏡で観察した、各種繊維の形状を図4に示

す。絹繊維は蚕が作る繭から得る天然の動物繊維であり、繊維表面は平滑で光沢感がある。毛繊維は動物の毛から得る天然の動物繊維であり、繊維表面にうろこ状のスケール(キューティクル)がある。綿繊維は綿花から得る天然の植物繊維である。天然のより(ねじれ)があり、断面が扁平なため、側面にくぼみがある。麻繊維は亜麻や苧麻の茎から繊維を取る靱皮繊維である。綿のようなより(ねじれ)はなく、真っすぐで節がある。レーヨン繊維は絹に似せて作られた化学繊維であり、天然の植物原料から作製しており、再生繊維に分類される。繊維形状は、側面の繊維軸方向に数本の線条が見られ、絹に似た光沢感と、滑らかな肌触りを持つ。

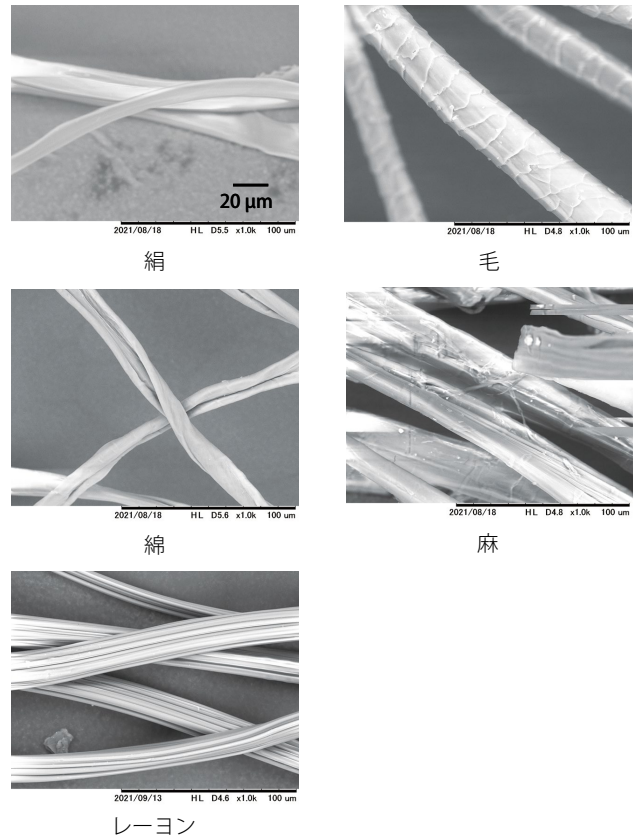


図4. 各種繊維の走査型電子顕微鏡写真(1,000倍)

3-2. 陣羽織の素材の同定

名品とされる戦国大名たちの陣羽織や、その趣味を踏襲した江戸時代の陣羽織は、羅紗(毛織物)や緞子や錦(絹織物)といった珍しい舶来品を用い、贅を競ったことが知られている。陣羽織の製作に使う素材は、絹、毛、麻、綿等様々である。

本研究では、雛形の陣羽織の表布(白色部・ページュ部)が、それぞれ絹・毛・綿製であると記録簿に記載されている資料について、分析を行った。ページュ色部が毛製と綿製の陣羽織は、外観はそれぞれ毛のような風合いであった。光学顕微鏡での観察結果を図5に示す。

陣羽織1の白色部の素材は、光沢感があり滑らかな触り心地であった。低倍率での観察からは、糸の太さが均一で、糸密度の大きい密な織物であることが分かった。高倍率での観察より、繊維は真つすぐでよりがないことが確認でき、記録通り絹繊維であると考えられる。陣羽織2のベージュ色部の素材は、ふさふさした毛のような触感で、虫食いがあった。低倍率での観察では、表面に毛羽のある添毛織物であることが分かった。高倍率での観察より、繊維の表面にスケールが確認でき、スケールは毛繊維のみに見られる特徴であることから、記録通り毛繊維であることが証明された。陣羽織3のベージュ色部の素材は、ふさふさした毛のような触感で、外観や風合いは陣羽織2と大きな差は見られなかった。低倍率での観察では、表面に毛羽のある添毛織物であり、陣羽織2と大変似た形状であった。高倍率で観察したところ、よりのある繊維が観察でき、天然のよりの持つ綿繊維であると結論付けられた。綿織物ではあるが、毛羽のある添毛織物を使用することで、毛に似た風合いを出していると言える。

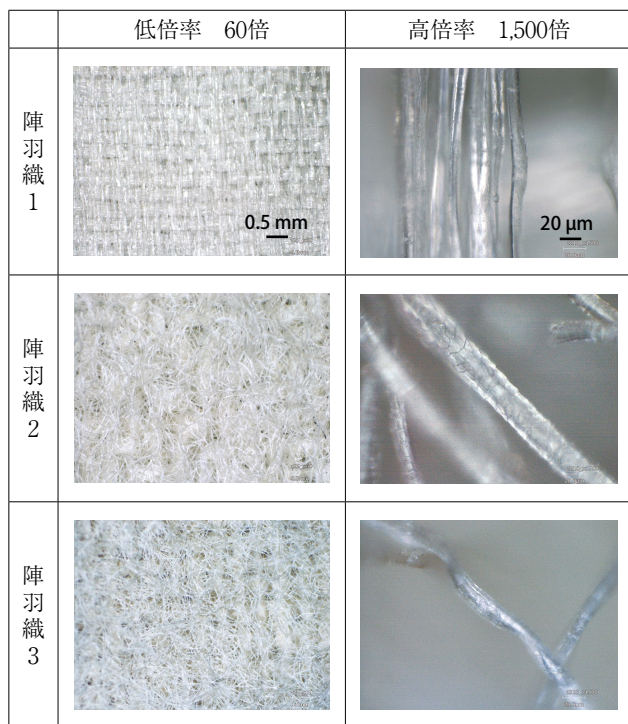


図5. 陣羽織表布の光学顕微鏡観察

図6に陣羽織3種類の表布(白色部・ベージュ色部)の平均摩擦係数(MIU)の結果を示す。MIUは低いほど滑ることを示す。陣羽織1は相対的に低い値を示し、陣羽織2と3は相対的に高い値を示した。陣羽織1は絹織物のため、絹繊維自体も平滑であり、絹のフィラメント糸から成る織物表面も平滑なため、滑りやすい素材となっている。陣羽織2と3は毛羽を持つ添毛織物から成るため、表面に凹凸があり、平均摩擦係数は高く滑りにくい素材となってい

る。たて・よこ方向の違いは、よこ方向の方が平均摩擦係数は高い傾向にある。一般に、織物は引きそろえたたて糸によこ糸を打ち込んで製織するため、よこ糸の方が屈曲している傾向にあるため、よこ方向の凹凸が大きく摩擦係数が高くなったと考えられる。陣羽織2と3の平均摩擦係数の値に大差はないことから、触感での違いは得られにくく、外観や触感だけでは、毛織物と綿織物の違いを判別しづらいと考えられる。毛織物からなる衣服の雛形製作時に、安価な綿織物で代用しつつも、元の素材に近づける工夫をしていたと考えられる。

図7に陣羽織3種類の表布(白色部・ベージュ色部)の接触冷感の結果を示す。縦軸は接触冷感評価値(q max)で、高いほど冷感が高いことを示す。一般に、q maxが0.2以上の場合に冷感のある素材と評価する。接触冷感評価値は触った瞬間の熱移動量の最大値を測定しているが、熱移動量が大きいほど、手などの接触部位から熱が奪われるため、ひんやりと感じる。接触面積が大きいほど、熱移動量が大きくなるため、平滑な素材ほど接触冷感が高くなることが多い。陣羽織1の値が高く、陣羽織2、3では低い値となった。摩擦特性の結果からも分かるように、絹織物から成る陣羽織1は、絹織物の表面が平滑なため、接触冷感評価値が高くなった。このため、陣羽織1と2、3の違いは触感からも感じられるが、陣羽織2と3はほぼ同じ値を示しており、ひんやり感からも素材の違いを感じることは困難と言える。

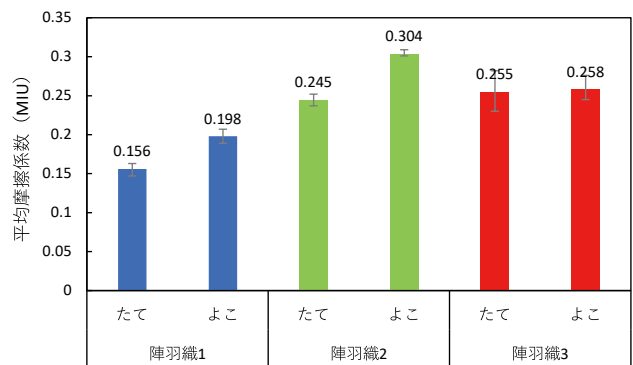


図6. 陣羽織表布の摩擦特性

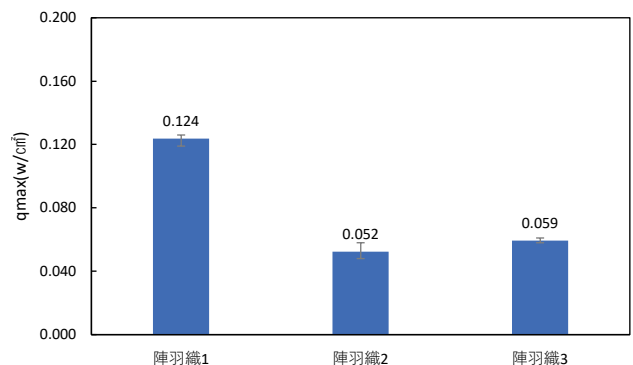


図7. 陣羽織表布の接触冷感

陣羽織の雛形については、羅紗(毛織物)や錦(絹織物)などの陣羽織を意識して、毛織物や毛織物のような質感の綿織物、絹織物で作られたのではないかと考える。また一方で、より簡素な絹や綿の陣羽織も存在し、こうした陣羽織の素材の多様性が雛形製作の生地選びに反映されたのかもしれない。

3-3. 綿織物のバリエーション

雛形製作の際には、安価で取り扱い易い綿織物を用いることが多かったようである。しかしながら、実際には絹、毛、麻等で製作される服の場合、それらの素材に近づけるように、様々な工夫を凝らしていたと考えられる。本研究では、素材の同定を行うと共に、どのようにして他の素材の質感に近づけていたのかを調査した。

3-3-1. 綿・毛・麻ライクな素材

調査した雛形のうち、本裁女物単本重(単本重)、ゼレイニーディスカート(スカート)、蚊帳は、それぞれ綿、毛、麻のような風合いの素材を使用していた。それぞれの表布の顕微鏡観察結果を図8に示す。

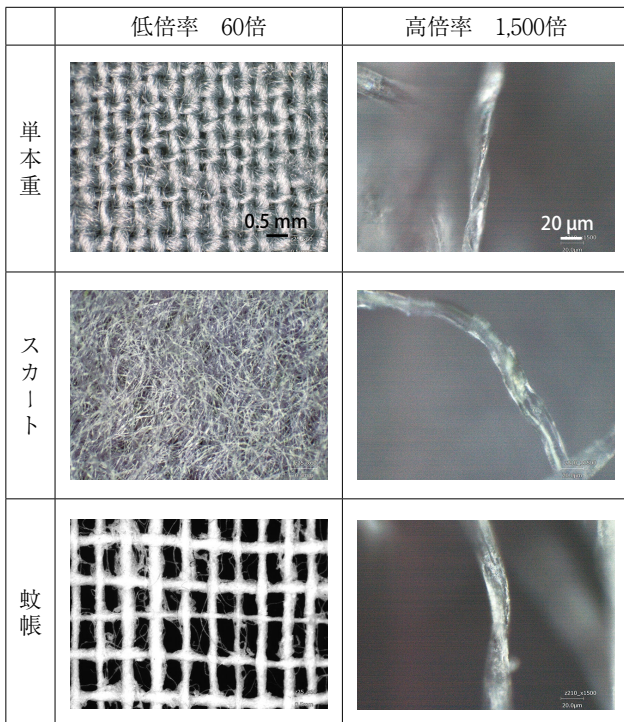


図8. 綿・毛・麻ライクな雛形の光学顕微鏡観察

本裁女物単本重は、綿の質感の雛形である。低倍率での観察から、平織の織物であることが分かった。高倍率での観察より、繊維により(ねじれ)があり、天然のよりを持つ綿繊維であることが証明された。

ゼレイニーディスカートは、毛の質感のある雛形である。毛は表面には水性のスケールがあり、水分をはじく

ため、「ゼ・レイニーディ=雨の日」のスカートには、毛織物がよく用いられたのかもしれない。そのような衣服を模した雛形であるので、毛の風合いを有する素材が用いられたと考えられる。低倍率の観察では、表面に毛羽のある添毛織物であることが分かり、これにより毛のようなふさふさした質感を出していると言える。高倍率の観察から、繊維によりがあり、スケールはないことが分かった。これより、毛繊維ではなく綿繊維であることが証明された。

蚊帳は、麻のようなややかたい素材で作られていた。低倍率での観察から、糸密度の小さい、粗い織物であることが分かった。また、糸表面に樹脂のようなものが付着しているように見え、樹脂などを塗布して、麻のようなかたく、滑りやすい質感としたと考えられる。高倍率での観察から、繊維にはよりが観察され、麻繊維は真っすぐで節を持つことから、天然のよりを持つ綿繊維であると結論付けられた。

図9, 10に、本裁女物単本重、ゼレイニーディスカート(スカート)、蚊帳の表布の、摩擦特性と接触冷感を示す。

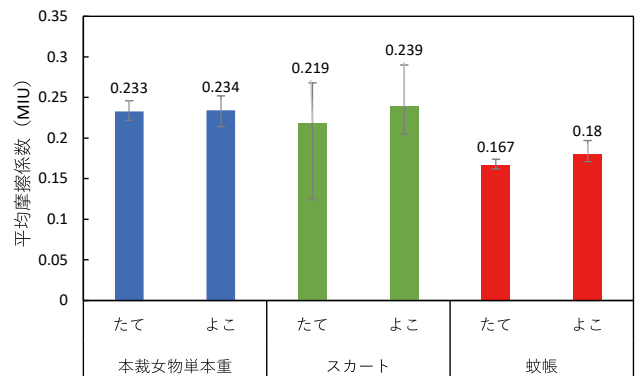


図9. 綿・毛・麻ライクな雛形の摩擦特性

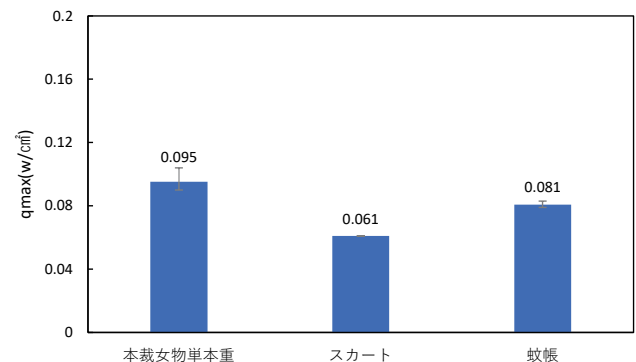


図10. 綿・毛・麻ライクな雛形の接触冷感

摩擦特性については、蚊帳の平均摩擦係数が、相対的に低かった。樹脂などを塗布することで滑りやすくなり、摩擦係数が下がったと考えられる。麻と綿は両方とも植物繊維であるが、麻は真っすぐでかたい繊維で、光沢感や接触冷感を有する。清涼感があることから、麻織物は夏物に

利用されることが多い、蚊帳は夏の時期に利用されることから、麻織物で作られていたことが多いのかもしれない。そのため、雛形では安価な綿織物を使用しつつ、樹脂加工によりかたい質感とすることで、麻の素材感に近づけていたと考えられる。

接触冷感については、毛のような質感を持つゼレニーディスカートが、低い接触冷感評価値 (q_{max}) を示している。これは、毛羽のある添毛織物を使用しているため、表面の凹凸が大きく接触面積が小さいことによると考えられる。毛は温かい印象の素材であることから、質感に合う結果と言える。麻のような素材の蚊帳については、綿のような素材の本裁女物単本重よりも高い値は示さなかった。これは、糸密度が小さく粗い織物であるため、接触面積が小さかったからと考えられる。

3-3-2. 絹ライクな素材

調査した雛形のうち、袍、表着、二枚重(下着)は、絹のような風合いの素材を使用していた。それぞれの表布の顕微鏡観察結果を図11に示す。

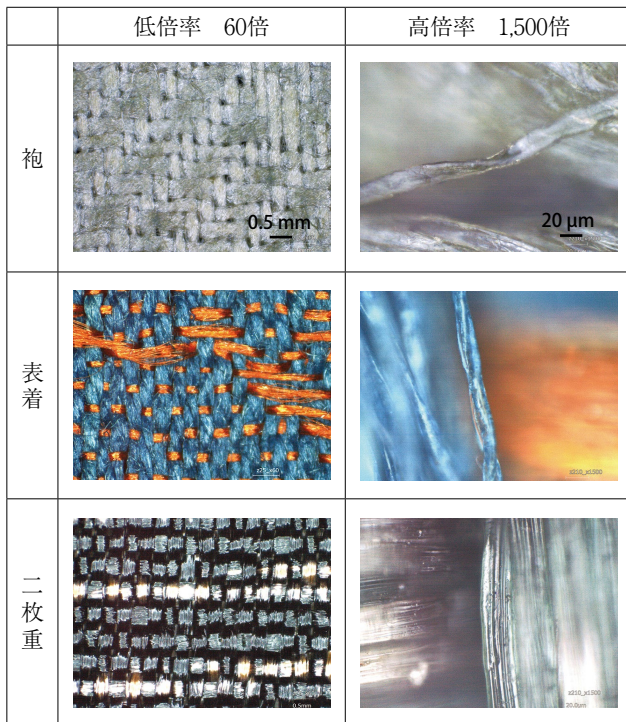


図11. 絹ライクな雛形の光学顕微鏡観察

袍は、低倍率での観察から、織物表面を過度につぶしている状態が観察され、表面をつぶして平滑にすることで、絹のような滑り感と光沢感を出していると考えられる。また、糸にうねりが見られ、絹糸のような真つぐな形状ではなかった。高倍率の観察より、繊維によりがあることが分かり、天然のよりの持つ綿繊維であることが証明された。

表着は、低倍率での観察から、糸の交錯の少ない織構

造であり、よりの少ない糸を使っていることが分かった。このように織構造や糸の構造で、織物表面を平滑にして、絹のような滑り感と光沢感を出していると言える。また、糸にうねりが見られ、絹糸のような真つぐな形状ではなかった。高倍率の観察から、繊維によりがあり、天然のよりの持つ綿繊維であることが証明された。

二枚重(下着)は、低倍率での観察では、糸密度の高い密な織物であり、糸は真つぐで絹織物のようにも見えた。高倍率での観察では、真つぐな繊維が観察され、綿繊維や毛繊維でないことは分かったが、絹繊維か化学繊維かの判別はできなかった。図12に走査型電子顕微鏡での観察結果を示す。繊維表面に、繊維軸方向に複数の線条が観察された。これはレーヨン繊維の特徴である。レーヨン繊維は湿式紡糸で紡糸される際に、側面に複数の線条ができ、複雑系の断面となる。これより、二枚重はレーヨン繊維を使用した織物であることが明らかとなった。レーヨン繊維による滑らかな触り心地と光沢感で、絹の質感を出していると言える。二枚重の素材については、記録簿には「絹」との記載があり、科学的な分析を行わなければ、レーヨン繊維であることは同定できなかった。本研究で初めて解明された成果である。

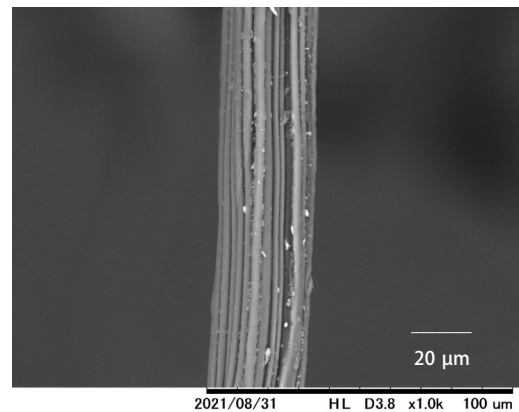


図12. 二枚重の繊維の電子顕微鏡観察

図13, 14に、袍、表着、二枚重(下着)の表布の、摩擦特性と接触冷感を示す。

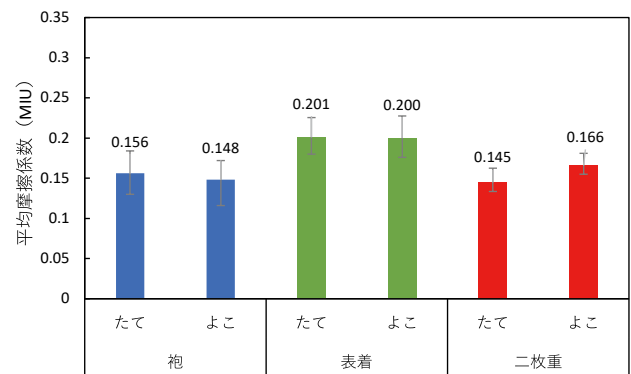


図13. 絹ライクな雛形の摩擦特性

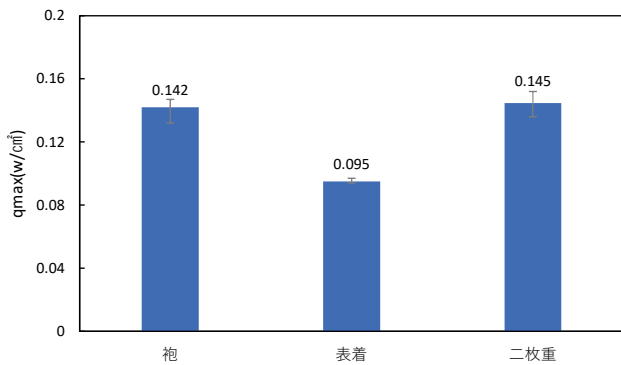


図14. 絹ライクな雛形の接触冷感

袍と二枚重が、平均摩擦係数は低く、接触冷感が高い値を示した。袍は表面を過度につぶして平滑にしているために滑りやすくなり、接触面積が大きいため接触冷感も大きくなったと考えられる。二枚重ねは、レーヨン繊維は綿繊維よりも平滑で滑りやすい繊維であるため、滑りやすく接触冷感も高くなったと考えられる。

綿織物のバリエーションとして、毛のような素材は、毛羽のある添毛織物を使用することで、毛のふさふさ感を出しており、麻のような素材は、綿織物に樹脂等を加工することで、麻のかたい質感を出していた。絹のような素材は、表面を過度につぶしたり、交錯の少ない織構造やよりの少ない糸を使用して、織物表面を平滑にすることや、化学繊維を使用することで、滑り感や光沢感などの絹の質感を出していた。このように、雛形製作時には、実物大の衣服の質感に近づけるため、安価な綿布を使用しながらも、様々な工夫を行っていたことがわかった。

4. まとめ

本研究では、本学博物館所蔵の重要有形民俗文化財を含む、数種類の裁縫雛形について、非破壊分析により素材の同定と素材加工法の分析を行った。

ほとんどの雛形が綿織物から製作されていたが、一部、絹織物、毛織物、レーヨン織物も使用されていることが分かった。これは、実物大の衣服の素材感に近づけることで、より実物大衣服の製作に近い縫製方法で、雛形製作を行うためであったと考えられる。また、絹や毛、化学繊維の織物は、綿織物に比べて高価であったと考えられ、安価な綿織物を使用しながらも、添毛、樹脂加工、表面を平滑にする等、様々な工夫を行い、実物大の衣服の素材感に近づけていたことが解明された。

本研究により、これまで科学的根拠を元には証明されていなかった、雛形の素材を正確に同定することができた。さらに、異なる質感を出すためのいくつかの素材加工法についても解明され、本成果は、当時の雛形教育を紐解く一助になると言える。

謝辞

本研究を行うに辺り、実験に多大なご協力を頂きました。家政学部服飾美術学科2021年度卒業生 石野美伶さん、剣持千佳さんに、心から感謝申し上げます。また、雛形資料と雛形情報をご提供頂きました、本学博物館学芸員 三友晶子氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 東京家政大学博物館. 東京家政大学博物館所蔵 裁縫雛形 渡辺学園裁縫雛形コレクション. 光村推古書院, 2019.
- 2) 三友晶子. 裁縫雛形を用いた裁縫教育の実態について: 対象7年卒業生の製作品比較を通して. 東京家政大学博物館紀要. 2012, 17, 89-106.
- 3) 三友晶子. 標本としての裁縫雛形. 東京家政大学博物館紀要. 2014, 19, 137-149.
- 4) 三友晶子. 歴史服の裁縫雛形に関する一考察. 東京家政大学博物館紀要. 2017, 22, 165-177.

毛織物を綿織物で代用した雛形製作の有効性について

—洋服雛形製作による検証—

杉野公子* 小野理佐子**

The educational effectiveness of substituting cotton for woolen fabrics in making *saiho hinagata* (miniatures made as sewing practice): Verification by replica production

Kimiko Sugino* Risako Ono**

1. はじめに

本学の前身である東京裁縫女学校・東京女子専門学校におけるハーフサイズ等の洋服雛形を用いた洋裁教育は、当時、実際に国内外で着用されていたフルサイズのデザイン・パターン・縫製方法が反映されていた^{1,2)}。これらの洋服雛形は一着に複数の縫製方法が取り入れられる等の工夫がなされており³⁾、フルサイズで製作するよりも細かな作業を伴い容易でないことから、高度な洋裁技術の習得に繋がったと考えられる²⁾。以上のことから、洋服雛形は過去の教材ではなく、現代の洋裁教育においてもその効果が期待できると考える。

しかし、洋服雛形の縫製には多くの場合、安価な綿織物を用いられていた⁴⁾。そのため、実際にフルサイズの製作を行う場合に対応できる、毛織物や絹織物の縫製力の向上に、洋服雛形が教材として十分な役割を果たすことが出来ていたのかについては疑問が残る。

そこで本研究では、フルサイズでは毛織物で製作されるスカートを綿織物で代用した洋服雛形製作の有効性について検証する。さらに、現代の洋裁教育における教材としての洋服雛形の教育的効果の有効性についても検証する。

2. 方法

2-1. 基準資料について

基準資料は、本学博物館所蔵の洋服雛形の中から、起毛した厚手のネル（綿織物）で製作されたハーフサイズのゼレイニーディスカート（東京裁縫女学校裁縫教授細目の課題作品。1905年（明治38年）頃に製作）とした（図1）。

基準資料のゼレイニーディスカートは「the rainy day skirt」、その名の通り、「雨の日のスカート」であり、フルサイズのスカートは、水をはじく効果のある毛織物で製作されていたと考えられる。

2-2. 基準資料の観察による復元について

2-2-1. パターンの復元

基準資料のゼレイニーディスカートのパターンを目視

*/** 東京家政大学家政学部服飾美術学科



図1 ゼレイニーディスカート（上から前、後ろ）
本学博物館所蔵 1905年（明治38年）頃に製作

観察により復元する。まず、ゼレイニーディスカートを計測し、パターンを作成する。そのパターンを用いてトワルを組み立て、基準資料のゼレイニーディスカートと比較し、パターンの修正を繰り返し行い、完成させる。

2-2-2. 縫製方法・縫製工程の復元

基準資料のゼレイニーディスカートの縫製方法・縫製工程を目視観察により復元する。ベルト付けや縫い代の始末などのスカートの縫製方法について調べると共に、スカー

トの縫い目や縫い代の重なり等を調査し、縫製工程をまとめる。

2-3. 異なる布による比較・検証について

2-3-1. 布の選定

本学博物館に所蔵されている裁縫雛形の多くは、実物作品が毛織物でも絹織物であっても、安価な平織の綿織物で製作されることが多い。それにも関わらず、基準資料のゼレイニーディスカートは平織の綿織物ではなく、起毛した厚手のネルの綿織物で製作されていた。そこで、フルサイズのゼレイニーディスカートは毛織物で製作されていたと考えられるため、毛織物に対するネルの綿織物と平織の綿織物との違いについて明らかにする必要がある。平織の綿織物には、現代ではトワルなどの縫製に使用する安価な天竺を用いることにする。今回の実験では、毛織物・ネル・天竺の3種類の布について比較・検証する。

2-3-2. 製作時間

3種類の毛織物・ネル・天竺の違いを明らかにする方法の一つとして、作品の製作時間を計測し、比較・検証する。

2-3-3. 縫製の難易度

教員（教員歴30年、1名）と学生（本学服飾美術学科3年生、3名）が、毛織物・ネル・天竺の3種類の布でハーフサイズのゼレイニーディスカート（後ろスカートの部分縫い）を縫製する。部分縫いの縫製は2021年の夏期休業期間中に行った。縫製した感想（学生は無記名によるアンケート調査を実施）を基に、毛織物・ネル・天竺の縫製の違い、縫製の難易度について、比較・検証を行う。

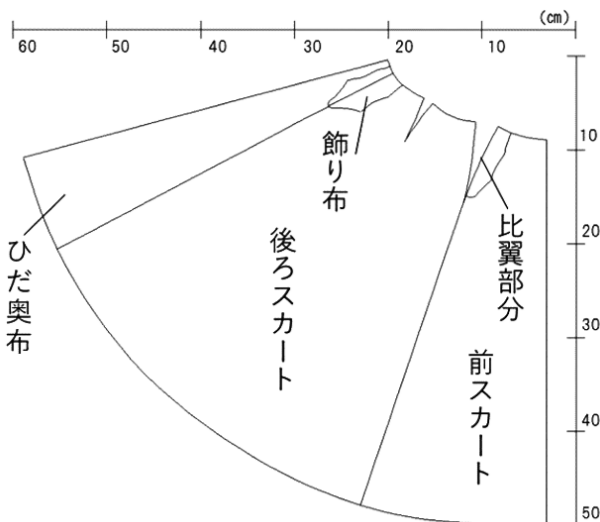


図2 復元したゼレイニーディスカートのパターン

3. 結果

3-1. 基準資料の観察による復元について

3-1-1. パターンの復元

基準資料のゼレイニーディスカートのパターンを図2に示した。パターンの作図には、基準資料のゼレイニーディスカートを作製した学生が作図したゼレイニーディスカートのパターン（基準資料そのもののパターンではない）を参考にパターンの作図を行った。

3-1-2. 縫製方法・縫製工程の復元

基準資料のゼレイニーディスカートの縫製方法を調べた結果、15項目に分けることができた。スカートの縫製工程は以下の通りである。

〈後ろスカートの縫製〉

- ①後ろスカートのダーツを縫い、縫い代に切り込みを入れ、アイロンで割る
- ②ひだ奥布の折り山に、アイロンをかける
- ③後ろスカートとひだ奥布を縫い合わせ、ステッチをかける
- ④ひだ山が突合せになるように、しつけでとめる
- ⑤飾り布を形作り、ステッチで縫う

〈前スカートの縫製〉

- ⑥あき（比翼仕立て）を作る
- ⑦ベルトを付ける

〈前後スカートの縫製〉

- ⑧切り替え線を縫う
- ⑨後ろスカートに持ち出しをつける
- ⑩切り替え線にステッチをかける
- ⑪あきの始末（千鳥がけ、門止め）をする
- ⑫後ろスカートにベルトを付ける
- ⑬裾の始末（千鳥がけ）をする
- ⑭裾の始末（ステッチ）をする
- ⑮ひだ山をしつけ（千鳥がけ）でとめる

3-1-3. 作品の復元

毛織物・ネル・天竺を用いて製作したゼレイニーディスカートを図3に示す。

3-2. 異なる布による比較・検証について

3-2-1. 製作時間について

製作時間を比較・検証した結果、毛織物は約9時間17分、ネルは約9時間15分という結果から、ほとんど製作時間が変わらないことが分かった。それに対し、天竺は7時間52分で完成することができ、毛織物に対して、1時間25分早く（製作時間にして、およそ0.85倍）仕上げるこ



図3 復元したスカート（上から毛織物、ネル、天竺）

ができた（表1）。この結果から、毛織物とネルに比べて天竺は、縫製作業がしやすい布であることが分かった。

表1 3種類の布による製作時間表

縫製項目	製作時間			
	毛織物	ネル	天竺	
後ろスカートの縫製	①	0:19:27	0:19:16	0:16:57
	②	0:04:37	0:03:55	0:03:26
	③	0:49:09	0:52:09	0:50:51
	④	0:07:24	0:06:45	0:06:17
	⑤	0:30:16	0:30:54	0:25:54
前スカートの縫製	⑥	1:43:15	1:46:06	1:35:09
	⑦	0:31:25	0:30:24	0:25:04
前後スカートの縫い合わせ	⑧	0:38:14	0:34:31	0:28:22
	⑨	0:40:47	0:38:21	0:27:33
	⑩	0:13:17	0:11:50	0:12:54
	⑪	0:18:02	0:19:45	0:11:44
	⑫	0:41:12	0:32:34	0:31:02
	⑬	1:35:29	1:44:25	1:20:20
	⑭	0:44:01	0:40:45	0:36:31
	⑮	0:20:33	0:23:02	0:20:01
合計時間	9:17:09	9:14:43	7:52:05	

3-2-2. 縫製の難易度

教員（教員歴30年、1名）と学生（本学服飾美術学科3年生、3名）が縫製した部分縫いの1組を図4に示した。毛織物とネル、毛織物と天竺について等、それぞれの難易度について比較・検証した。



図4 学生が製作した後ろスカートの部分縫い（左から、毛織物、ネル、天竺）

3-2-2-1. 教員の結果

毛織物とネルについて縫い比べた結果、共に布に厚みがあるため、後ろスカートのボックスプリーツ部分は布が重なり作業が難しい点は同じであった。しかし、必ずしも縫製上の難所は同じではなかった。後ろスカートの飾り布は、複雑な形状を作り出すために縫い代をアイロンで伸ばさなければならない。ネルは伸縮性がいないために縫い代が伸びず、飾り布の曲線を作り出すことは難しかったが、毛織物は伸縮性があり、飾り布の曲線を作り出すことは容易であった。しかし、毛織物はネルに比べて弾性力があるため、飾り布の先の縫い代にアイロンをかけてもネルのように形状を保つことは難しかった。一方で、糸密度の高いネルの飾り布の先は縫い代が重なることでミシンの針が通りにくくなり、ミシン目が不揃いになりやすかった(図5)。その他、毛織物ではアイロンを用いて簡単にできた裾の縫い代のいせ込みがネルでは難しく、スカートの裾にミシンステッチをかければ波打つほど伸びてしまい(図6)、アイロンで形状を整える必要があった。さらにネルでは、裾の



図5 飾り布 (左から、毛織物、ネル)



図6 ネルで製作したスカートの裾

千鳥がけの糸(30番)が太いために糸の通りが悪いだけでなく、まつり目が表にひびきやすかった(図7)。

毛織物と天竺について縫い比べた結果、毛織物に対して天竺は、布に厚みがなく、全体を通して縫製は易しかった。しかし、ネル同様に飾り布の縫い代の伸ばし、裾の縫い代のいせ込みが毛織物のようにはできなかった。また、裾のまつり糸が太く(30番)、糸の通りは悪かったが、ネルのようにまつり目が表にひびくことはなかった(図7)。

毛織物と綿織物の縫製について比較・検証した結果、毛織物の代用品としては、天竺よりもネルの方が良かった。天竺と比べてネルは布に厚みがあり起毛しているために見た目が似ている。しかし、ネルに比べて伸縮性のある毛織物の製作で得られる経験とは異なるように感じた。

3種類の布を縫製した結果、その難易度は、ネル、天竺、毛織物の順番であった。その理由として、毛織物はミシンで縫いやすいだけでなく、布が厚いのでまつり目が表に出ないようにと神経質にならなくて済む。また、アイロンをかけることで、切り替え線の縫い目が整うだけでなく、ダーツ先も無理なく人体になじむように仕上げることができたからである。このようなことは毛織物の縫製を数多く行っていれば、今回のような縫い比べをしなくてもおおよその見当がつくようになるものである。毛織物のように起毛した厚手のネルは、伸縮性がなく、織密度が高いために、同じ綿織物の天竺と比較しても縫いにくい布であった。

以上のことから、ゼレニーディスカートが製作された明治時代の洋服雛形を教材とした学びは、毛織物と天竺に比べてネルの縫製の難易度は高いため、縫製方法を理解するだけでなく、洋裁技術の向上に繋がったと考えられる。

3-2-2-2. 学生の結果

毛織物とネルについて縫い比べた結果、毛織物は伸びるがネルは伸びずに布がしっかりしているのでミシンがかけやすい、どちらも起毛しているがネルの方が作業しやすかった、ひだ奥のアイロンがけは毛織物よりもネルの方が折りは戻りにくかった、という意見があった。その一方で、毛織物は伸縮性があるために飾り布の形状をきれいに製作できた、スカートの裾の縫い代をアイロンでいせ込むことができたが、ネルはいせ込みができず、タックで縫い代の始末を行った(図8)、という意見もあった。

毛織物と天竺について縫い比べた結果、毛織物に比べて天竺は布が薄い、伸びにくい、アイロンをかけると折りが付きやすい等、作業がしやすかったという意見が多くあった。また、天竺は何度も製作しているために扱いにも慣れており、縫いやすい印象を持っていたという回答もあった。しかし、ネルと同様に伸縮性がほとんどないために、飾り布の縫い代の伸ばし、裾のいせ込みのアイロンがけは難しかった、という意見もあった。



図7 裾の始末（上から毛織物、ネル、天竺）

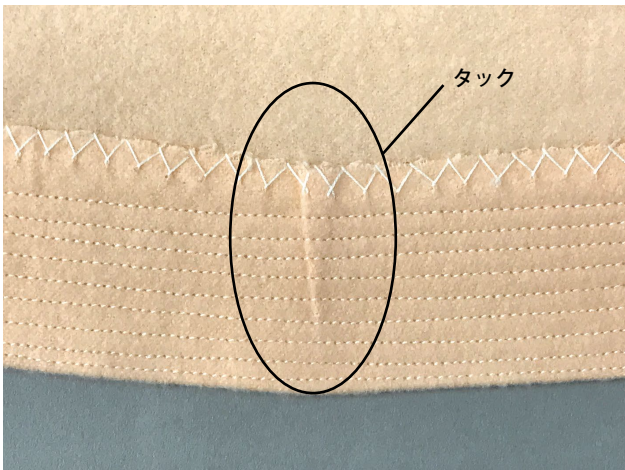


図8 学生が製作したネルの裾の始末（タック）

毛織物と綿織物の縫製について比較・検証したアンケートの結果から、毛織物の代用品としては、天竺よりもネルの方が良いという回答であった。天竺に比べて厚みがあり、触り心地が似ている、縫いにくいところが似ている等が理由に挙げられた。

3種類の布を縫製した結果、その難易度は、毛織物、ネル、天竺の順番で、教員の結果とは異なった。その理由として、起毛し、伸縮性のある毛織物を扱った経験がほとんどないことが考えられる。本学科のカリキュラムで毛織物を縫製する洋裁の授業は、服飾造形Ⅰ（1年生、後期、必修科目）と服飾造形Ⅲ（3年生、後期、選択科目）である。服飾造形Ⅰでは、ファスナー・ベンツの部分縫い、オリジナルスカート（綿織物でも可）、服飾造形Ⅲでは、フラップポケットの部分縫い、テーラードジャケットである。なお、3種類の布のゼレニーディスカートの製作は3年生の夏期休業期間を利用したため、ジャケットの縫製を行っていない。アンケート調査から、1年時の作品製作で毛織物の縫製が難しい印象を持ってしまった学生がいたことが分かった。なお、毛織物と同様に縫製経験の少ないネルについては伸縮性がなかったため、伸縮性のない天竺の縫製が経験として活かされ、難しくなかったようである。

以上の結果から、学生にとって縫製が一番難しい毛織物であっても、縫製の経験を通し、布の特性や縫製時の注意点を習得すれば、毛織物の縫製は難しいものではなくなることが示唆された。

4. 考察

毛織物を綿織物で代用した洋服雛形製作の有効性について、ハーフサイズの洋服雛形のゼレニーディスカートを基準資料とし、比較・検証した。ゼレニーディスカートが製作された明治時代、日本の毛織物の生産は技術が未熟な上に生産も極めて微々たるものであった⁵⁾。そのため、イギリスから毛織物は輸入されていた⁶⁾。当然、フルサイズに比べ使用する布が少なく済む洋服雛形とは言え、当時の女学生が容易に手に入る布とは考えにくい。そこで、毛織物に類似した布として、見た目や布の厚さ、完成するまでの所要時間がほぼ同じなネルを選定し、少しでも毛織物に近い布で縫製の経験を積ませる工夫を行ったことは、明治時代の洋服雛形を用いた洋裁教育効果としては有効であり、大変評価できる。

しかし、現代において洋服雛形のゼレニーディスカートを製作する場合は、明治時代とは異なり、店頭で毛織物を購入できることから、毛織物の特性を学ぶ上でも代用品ではなく、毛織物で製作することが望ましい。また、ファストファッションの流行、学生という立場から、なかなか上質の毛織物に触れる機会が少ない。上質な毛織物の縫製の経験も洋服雛形であれば布代を抑えて学ぶことができ、学生はよ

り多くの経験を積み重ねることができる。現代の洋裁教育に洋服雛形のゼレイニーディスカートを取り入れる場合、過去に行われていた授業を伝統という名で安易に再現するのではなく、その時代、時代に合わせた教材研究を真摯に行い、必要に応じて改善していくことが求められると考える。

5. おわりに

ゼレイニーディスカートの製作された明治時代の教材等の資料は第二次世界大戦で焼失してしまったため、想像ではあるが、校祖 渡邊辰五郎先生が教壇に立たれた頃から、学ぶ女学生に寄り添う教育を行ってきた本学の歴史を繙けば、ゼレイニーディスカートの洋服雛形をいつもと同じ平織の綿織物ではなく起毛した厚手のネルを用いる理由や、毛織物の特性などの講義があったと考える方が自然ではないだろうか。

今回のアンケート調査では、学生が3種類の布を用いてゼレイニーディスカートの(部分縫い)を製作した際、布によって裾の縫い代の始末を変えた学生がいた。学生が同じデザイン、同じパターンでも布の特性を踏まえて自主的に縫製方法を変える工夫をしたことは、辰五郎先生が裁縫雛形を考案した当時には想定していなかった、教材としての新しい価値の発見ではないだろうか。学生が織物の特性について学ぶ方法には、講義・実験などが一般的である。そこに洋服雛形の縫い比べを加えることで、より服飾造形に特化した織物の特性を多角的に学ぶことができると考える。これは、本学独自の洋裁教育となり、裁縫雛形教育の新たな可能性に繋がるだろう。

今回の研究では異なる布の縫製に焦点を当てたが、布が異なればシルエットにも影響が出る。明治時代の洋裁教育において、洋服全体のバランスやシルエットの造形についてどの程度の授業が行われていたかは定かではない。しかし、現代の洋裁教育においては、洋服全体のバランスやシルエットは重要である。さらに、雛形(ハーフサイズ)からフルサイズを製作した場合の布とシルエット、造形の違いについても今後の研究課題とし、先人たちの教材に対する工夫と努力を引き継いで行きたい。

6. 謝辞

研究・発表の機会を与えてくださった本学博物館長 手嶋尚人教授、多くのご教示を賜りました本学博物館 三友晶子学芸員に、心より御礼申し上げます。また、実験に協力してくださった東京家政大学服飾美術学科の学生の皆様に心より御礼申し上げます。

7. 註

- 1) 杉野公子、「裁縫雛形と欧米女兒服との比較検証について —裁縫雛形女兒服の実寸大レプリカの製作—」、

- 服飾学研究(作品編)、Vol.2、No.1、2019、pp.79-86
- 2) 杉野公子、「裁縫雛形女兒服の実寸大レプリカの製作 —1920年代の東京女子専門学校における洋裁教育内容の検証—」、服飾学研究(作品編)、Vol.3、No.2、2020、pp.53-62
- 3) 杉野公子・山田民子、「レプリカ製作を通してみる渡辺学園の洋裁教育」、東京家政大学博物館年報、2019、pp.25-30
- 4) 東京家政大学博物館、『東京家政大学博物館所蔵裁縫雛形 渡辺学園裁縫雛形コレクション』、光村推古書院株式会社、2019、p.19
- 5) 日本毛織株式会社、『日本毛織物三十年史』、日本毛織株式会社、1931、p.4
- 6) 柴田和子、『銀座の米田屋物語 ある洋服屋の100年史』、実業之日本社、1983、p.32

東京家政大学博物館年報
令和3年度

2022年7月1日 発行

発行 東京家政大学博物館
東京都板橋区加賀1-18-1
Tel 03-3961-2918
Fax 03-3961-5246

印刷 株式会社 白峰社
東京都豊島区東池袋5-49-6
Tel 03-3983-2312

 東京家政大学博物館
